

きのうのはなし

—はじめのにかげつ—

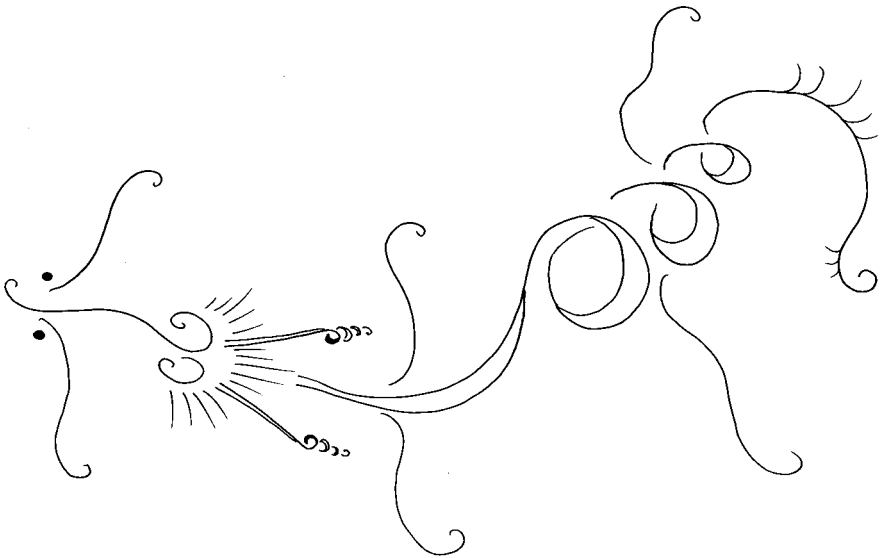


金井亭 猫好

目次

第一回 二月十四日午後ヨリ小雨 …… 三
第二回 三月十四日空ヨリぴえろ …… 二二
第三回 三月廿六日暫シ休業 …… 四一
第四回 四月一日街ニ降ルぱふえ …… 五七
あとがき …… 八一

イラストレーション……水瀬^{みなせ}霖生^{りお}



3 第一回 二月十四日 午後ヨリ小雨

第一回 二月十四日 午後ヨリ小雨

—

二月十四日、午後より小雨。

土手際どてぎわにある小さな階段を降りると、薄い下草の先に川が広がる。

私の午後の散歩は、そこで折り返しとなる。

小雨の中は歩きにくい。

白い着物が濡れるのはまあ気にしないが、濡れた裾すそが重くなり、歩あきにくさを増してゆく。まして足元の草履ぞうりは、濡れた草の上では滑りやすい。

だからかもしれぬ。

普段からよく見る風景、よく見る川と草花たち。その中に一つ、見慣れないものを見つけた。

カッン

違和感のあつた足元を見ると、なにやら茶黒いか

たまりが落ちてゐる。珍しくも犬猫がもよおしたのかと思つてしゃがみこみ、よく見てみる。だが、その種のものではなかった。つやのある黒いかたまり。これはたしか…

(チヨコレート)

そう、ちよこれいとう、というものではなかったか。口にしたことはないが、私の知る限りではさして安価なものではないはずである。

なぜそんなものがここに落ちてゐるのか？土手からはやや離れてゐるこの場所では、転がつてくるはずもない。当然、近くに落とし主がいるであろう。そこまで考へてはたと気づいた。

緑の草の中、花が咲いたように桃色のものが見える。目を凝こらしてよく見ると、それは巾着きんちやくのような包みであつた。開ききつたその包みからは、小さなちよこれいとうがこぼれてゐる。その透き間から見えるのは、手で抱えられるほどの大きさのちよこれ

いとう…丸いでなく、角ばるでもなく…

(ハート型)

うむ。はあと型か。たしか、心を表す形であったな。しかしいかな。これでは濡れてしまつてはいないか。

(濡れちゃえ！)

ふと、そう聞こえたような気がした。

私はその主を探して左右を見る。すると、土手に降りる階段に人影があつた。傘を頭にかぶるようになり、その桃色の包みを…いや包みの方をぼつと眺めている。先ほど気付かなかつたのは、傘の色が緑がかつていたせいであろう。

私は、包みをつまみあげて、中の雨粒を払つた。傘の中をのぞき込むと、小柄な女の子の顔がある。

「はあと型とは、心を現すそうじゃ。」

これは、お前さんの心じやろう？心を粗末にしてはいかな」

どうやら学生らしい。外套コートからのぞいている紺色の服、この種の服には見覚えがある。

「た…べて」

しばらくしてから、目の前の子が口を開いた。もっとも、うつむいているので口そのものは見えぬが。

顔色を見よつとかがみ込むと、この子は足に顔を埋めるように、さらにつつむいた。しかたない。一口いただこうか。

実のところ、興味がないわけではない。ちよ、これいとう…話には聞いているが、果たしてどのような味のものか…

私は、大きなはあと型の回りにある、小さなはあと型を口に含んだ――

二

桂くん…

ふられちゃつた。

いっしょけんめい、作ったんだけどな…

あたしの目の前に、チヨコの包みがひろがってる。

桂くん…あたしと同じ料理部の、数少ない男の子。

『料理の鉄人』にあこがれて、料理部に入ったって
言ってたっけ。

あたしが初めて作ったチヨコ。桂くんのためだけ
のチヨコ。だけど、あげられなかった。

どうしよう。あしたからどんな顔で会えばいいん
だろ。

あたしのチヨコ。もう誰もいらさないチヨコ。

あんたなんか、濡れちゃえ！

「はあと型とは、心を現すそうじや。

これは、お前さんの心じやろう？心を粗末にして
はいかんな」

だれかの声でした。言葉がおじいちゃんみたい。

粗末…か。そうね。チヨコが悪いわけじゃないよ
ね。あたしが悪いんだもん。ごめんね、やつあたり
しちゃって。

この人でもいいや。食べてもらってよ。…桂くん
には、もう食べてもらえないんだから。

「た…べて」

やだ、声がふるえてる。…雨にぬれてるせいよね。

おじいさんの気配がする。あたしの顔を見ようと
してるみたい。やだ。きつとぐしゃぐしゃな顔なん
だもん。

どうでもいいから、さっさとチヨコ持って、どっ
か行っちゃってよ!!

「なかなか、よいところではないか。

…やはり返そう。これはわしには勿体ない」

え…？

あたしは顔を上げて、びっくりした。おじいさん
じゃない。はたち過ぎぐらい。真っ白い着物に、頭
の上でしばった髪。顔も時代劇の…主役までいかな
いけど、ちよつとかっこいい。わきに刀でも持って
るんじゃないかしら？

…じゃなくって！

もったいない!

なんで? どうして... あ、だめ。なんか、くらくらして...

三

困った。

いきなり倒れるとは思わなのだが、私の部屋に連れ帰って風呂に入れたまではよかった。

あの子もずいぶん濡れているようであるし、替え着を出してやるうと思っただが... 大きさがわからぬ。

ここには必要とあらば、ほとんどの体格の者に合う着物がある。が、あの子に裸のままでは選ばせるわけにもいくまい。それでは風呂で暖まった意味がない。

考えあぐねた結果、もっとも単純な結論に達した。本体を合わせられぬのであれば、着ているものを合わせればよい。私は早速、風呂場へ向かって歩き始めた。

風呂場の手前に脱衣場がある。本来この家の風呂は厠かわやと隣り合わせだったのだが、無理を言って厠を移動させた。その関係で、部屋の大きさは不釣り合いなほど脱衣場が大きい。

私はいくつがあるかこの中から、あの子のものであるう衣類をみつけて広げてみた。

外套コートと上着はすでに別室に干してある。ここにあるのはシャツ、スカート... いやにしわになっていると思つてよく見ると、どうやら私の考え違いらしい。しわにしてはあまりにも一定間隔であるし、極めて強く、とれそうもない。これは、こういうものなのだろう。とりあえず、この二つの寸法を簡単に測る。これよりやや大きめのものを着せれば、まあ温かく過ごせるであろう。

問題は下着である。これは大きめというわけにはいかない。幸い、下半身用の下着は問題なかった。私のもとの違い、異常なまでに伸び縮みがきく。大小莫ズリヤスというくらいであるから、おそらくそう極端な体格

の違いがなければけるのだらう。以前に同じものをたんすの中で見かけたときには、なぜここに子供用のものがあるのかわからなかったのだが、これで得心とくしんした。

次に見つけたのは肩ひものついた、やや長めの肌着。これは非常に薄く、シャツの胴回りとほぼ同じなのでそれに準ずることにする。

最後に残ったものが一つ。乳当しるものてである。こればかりは私には理解できない代物だ。下と同じに伸び縮みするのかと思えばそうでもなし、さりとして大きさを測るうにも、どこを測ればよいのかわからない。岩を包むわけでもあるまいし、椀わん状の形を逐一まぐいち測ったとて意味はあるまい。意味があるとすれば、おそらくはその容積であらう。だがしかし、仮にも身につけるものに水を入れて、なん合あは入るなどとやるわけにもいかない。

先ほどから頭の中の声が黙もくっているところを見ると、やつもこの種のことには詳しくないらしい。

…しかたない。これだけは諦あきらめてもらおう。

測り終わると、衣類を洗濯機に放り込む。さすがにスカートだけは、このきちんとしたしわを壊さない自信がなかったので干すだけにしたが。

私はたんすの前に戻ると、測った値をもとに、ちょうどいい大きさの服を探してみた。

四

ぴちよん……

ちいさな部屋のくせに、けっこう大きなお風呂。あたしは、その中であつたまつてた。

お風呂の木のワクにつかまりながら、ぼくとして。なんにも考えずに、ぼくとして。ふしぎ。さつき、土手に座つたときは、もう死んじやおうかなんて思つたのに。もうそんなことどうでもいいや、つて思つちゃう。ほんと、ふしぎ。

でも、ぼくとしてても、さっきからちらちら思うことがある。

あの人。白い着物を着た、背が2mもありそうなあの人。

「なんなんだろ、あの人」

おじいちゃんみたいなしゃべり方で、なんかズレてる、あの人。

考えてると、あの子の言葉が浮かんできた。

（はあと型とは、心を現す。これは、お前さんの心だろう？）

「あたしの、心。か…」

そりゃ、心は込めたわよ。目いっぱい！でも…

（心を粗末にはいかんな）

粗末になんか、してないわよ!! なんか、思い出したらムカついてきたわ。

（…もつたいない。いい心ではないか）

そのときの、あの子の顔。だめ。さっきからこれで怒る気が失せちゃう。

そのせいかも。ムカついて、ほっとして、またムカついて、またほっとして…繰り返してたら、なんか、どうでもよくなっちゃった。

そうよね。振られたからどうだ、ってこともないわ。また会ったらおはようって言って、笑ってればいいじゃない。

…言えたらね。そう、それが問題なのよ。いろいろ思っても、口に出せないの。チヨコ渡すときだつて、これ食べて、って言えなくて『こっこっこ…』だもんね。にわとりじゃないんだから。

自分でも、これじゃいけない、って思うんだけど…

お風呂から上がって、カゴにあったタオルで頭を巻いて、で、着がえ着る。

…え？ そついえば、こっつて、どこ？

あたしん家ちじゃないわ。たしかあのと、あの人におぶってもらって…コートと上着脱いで、お風呂入って…で、いま、あたしが着てるのって、見たこ

とない服…

「お、上がったかな」

あたしは、そのまま飛びついた。着物（着流し）って
いうのかな？（の首のところを思いつ切りつかんで、

「あつ、あつ、あたしのふく!?!」

「あん？上着と外套はそこに干してあるが、まだ乾
いておらん

下着のたぐいは洗濯機の中じゃ。そろそろ洗い上
がるころかの」

そのときのあたしは、真っ赤になってたに決まっ
てる。

「あたしのつ、パ、パンツにっ!?!」

あの人は口の中でもぐもぐ言ってたけど、すぐボ
ン、って手を叩いた。

「ああ、下半身用の下着のことじゃな。合わんかな
？お前さんのがけっこう伸び縮みするようじゃった
から、それでいいとおもったのじゃが…」

「の、のばっ!?!」

変態！すけべーちかん！

頭の中ではいっばいどなってたのに、やっぱり声
にならなかつた。これじゃだめだよ！

「そうじゃ。他のはだいたいわかつたんじやが、ひ
とつだけ…乳当ての大きさがわからんでな。悪いが
お前さん、選んでくれんかね」

そこまで言われて気がついた。目の前の床に、い
っばいブラが並んでる。バーゲンの下着コーナー
だつて、こんなに置いてないわよ！

はあ。なんか、クラクラしてきた。

でもなぜだろ。この人、どうしても悪い人に見え
ないの。女の子前にしてブラいっばい並べるなんて、
変態しかやらないよ〜なことされても、なんかちが
う。クラスの子たちや、お父さんにやられたら
悲鳴モノなのに…なぜだろ？

…あ、いけない。ほんとにクラクラしてきた。目

の前が回ってる。いろんな色のブラが頭の中を走り回ってるみたい。気持ちわるい。

目をあけてられなくて、ぎゅっとつむつたら……肩をつかまれたような気がするけど……そのまま……

五

危ないところであった。

呆けたように立っているだけかと思えば、物も言わずに倒れるとは。あと一歩遅ければ、大事な顔があざになってしまつところである。

肩を、壊さぬ程度に支えてやる。と、倒れた理由がわかった。

熱い。

風呂上がりの温かさではない。明らかに発熱している。風呂でかえって悪化してしまったのか。うかつであった。

ともかく、抱えあげて空いた部屋へ急ぐ。体当た

りで扉をあけ、洋風の寢床に放り込む。

布団ふとんをかけ、しばらく様子を見る。

小さく唸りながら、しきりに寝返りを打っている。さりとて、起きる様子もない。

(まずい！)

私は大きく肯いた。言われるまでもない。人がこの種の行動をするとき、その身体からだがどういった状態にあるか、それは私をもっともよく知っている。

……はて、なぜ知っているのだろう？

考えながらも、私はすぐ台所に向かった。

六

あつい。

あついよ。

でも声が出ない。なんか気持ちわるくて、ただ転がっているのがせいっぱい。

11 第一回 二月十四日 午後ヨリ小雨

どうしたんだろ？どうなっちゃうんだろ？苦しいのに、うまく動けない。からだは、自分のじゃないみたい。こんなの、はじめてだよあー！

どうしようもなくて、ぐるぐるしてる。それが、なにかでおさえつけられちゃった。力強い手が、あたしの鼻をつまむ。く…ぐるじい。

苦しくてかぱつと開けたくちに、なにか入ってる。…う…にが…い！！

おもわず吐こうとしているところに、お水が入ってきた。おまけに鼻はつまんだまま。やめてよ！い…いきできないじゃない！！

半分くらい吐いたかな？でも、あとは飲み込んでしまった。そのあとで、あま…い味が広がってく。アメかな？もう、ほんとに子供あつかい。だけどほつとする味。

なんか楽になったみたい。頭はまだあついけど、気持ちわるくない。

あつい頭に、なにかのつかつてきた。冷たい、なにか。氷みたいに固くないけど、タオルみたいにべとつ、つてくるものじゃない。なんだらう？

ぼ…とした頭で考えてもわかるわけないわ。ちよつと目を開けて…やっぱり、わかんない。

手のひらでも当ててるようにしか見えないんだけど、そんなことしたら、もつと暑くなるよね。ふつ。でも、なんなんだろ…

そんなことを考えてたら、すつと目の前が暗くなつていつちゃった。

七

二月十五日、晴天。

朝、窓を開ける。この季節にしては、雲が少ない。世の人には雨を嫌い、快晴を好むものが多いが、私はむしろ、それに寂しさを覚える。

昨夜の子はどつであるうか、そのことが頭をよぎ

る。すぐにあの子の部屋に向かい、入ろうとしてふと迷った。

たしかこの種の扉の場合、礼儀としては叩くのであつたか――

(ノック)

おお、そうだ。ノックするといふのだった。私は扉に向き直つて、二度ほどそつと叩いた。あまり強くすると壊してしまふ。いや、大げさではない。この部屋ができてからすでにいくつか壊しているのだ。壁やら床やら……そんなに弱く造れと言つた覚えはないのだが。

コンコン

返答がないところを見ると、寝ているのだろう。私はあの子を起こさないようにそつと部屋に入ると、その額に手を当ててみた。……どつやら、発熱は治まつたようだ。

とはいえ、あれだけの発熱である。一日は寝ていた方がよからう。私は、この子の持つていたかばんから身分証を探し出すと、電話の前に陣取つた。

市立雁ヶ谷中学校二年六組

和泉和子

『いずみかずこ』か。ふむ、均整の取れた名だ。親御さんには名相の心得があるとも見える。

身分証の隅の小さな文字をなんとか解釈し、電話の打鍵に数字を打ち込む。そのうち、手にした送受信管から、軽い音が……

(受話器！)

わかつた、わかつた。

「あ、申し申し。雁ヶ谷中学校ですかな？」

二年六組にて教鞭をとられている方にお話ししたいのですが……」

八

目を開けたら、昼だった。

きのうの雨が、うそみたい。なんてことのない、いいお天気。

あつかった頭も、もう大丈夫みたい。きつと、あの人が看病してくれたんだわ。きのう会ったばかりなのに、なんか嬉しい。

そんなこと考えながら、部屋を出てみた。あたしの制服とかばん置いといた部屋の扉をあけたら…あら。

目の前は、またブラのオンパレード。

…いくらなんでも、二日つづけたら変態よね。

そうやって、うんざりしながら見てみると、ちょっときのうと違つ。大きさがそろつてるの。きのうはばらばらだったのに。なんか、みんな見慣れた大きさ。

「七十八のびい」

へ？

背中から声が出た。でも…い、いま、なんていっ

たの？

「七十八のびい、か。なにやらよくわからんが、どうやらそういう測り方があるようじゃの」

か、つ、と赤くなるのがわかる。78のBっていったら、あたしの、あたしの…

「な、な、な…」

なんであんたが知ってるのよ!! そう言いたかったんだけど、やっぱり口から出て行かない。

「なに、礼には及ばぬ。やはり替えがないと不自由じゃろうてな、お前さんの乳当てをちと借りて、下着の店に聞きに言つたんじゃ。この大きさはどのように見ればよいのか、との。」

なにやらふしぎそうな顔をしておつたが、親切に教えてくれたわい。一所懸命、涙までためて説明してくれおつたし…

…それ、笑つてたんじゃないの？

でも、光景を想像すると、あたしもなんだかおかしくなっちゃう。真っ白い着物姿のこの人が、女の

子のブラ持って、商店街を歩いてる姿…うくつ。だめ、やっぱり怒れないよぉー！

「そうじゃ。済まぬが、ちと借りたぞ」

って目の前にでてきたの、あたしの学生証。もう、ちよつとくらいじゃ驚かないけど、なんで学生証？「和子くんの先生に連絡しておいたわ。風邪で休むとな。ま、今日はゆっくり休んでゆくとよい

そうそう、ちよつと良い。食事ができたところじゃ」
「あらま。まめのね、この人。そういつとはちゃんと気がつくんだわ。

そういえば、きのうのお昼からなにも食べてない。気がついたら、なんかおなかへってきちゃった。なんでもいいから、いっぱい食べたい気分。

とはいつても…うごん。だよね、これ。

目の前に出されたもの見て、あたしの目が点になった。

なんていったらいいのかしら。見事に、こう、う

どんって感じのうごん。だって、ほかになんにも入ってないんだもん。ほんと、うごん。

あたしの目はしばらく点になりっぱなし。もう、自分でわかるくらい。

「ねぎ…とか…？」

「あるにはあるのじゃがな。どうも、それをどうすればよいのかわからん」

だめだ。このまま口べたじゃ、栄養失調になっちゃう！

「お…お台所、使っていない？」

「ほう、作れるのか。これはありがたいな」

そう言つて、にこつ、ってわらうの。なんか、見るだけで照れちゃう。おじいちゃん言葉とこのきもの姿でなかつたら、ぜったいすてきだわ。

よぉし、現役料理部のうでまえ、見せてあげちゃう！

でも…

あたしは、台所に歩きながら考えてた。でも、なん

でうどんをそのまんまで食べようとしたんだろ。料理ができない、って言ったって、うどんをゆでられるんだもん。ゆでてることに、おねぎ入れるだけではないはずなのに…

九

夕食はうまかった。そうか、うどんというのは、これほどうまいものであったか。まだまだ、ここでは知らぬことが多い。

「あの、あなたの名前は、なんていうの?」

食事の余韻に浸っているところへ、和子くんが話しかけてきた。

「ん? おお、そうか。名を名乗っておらなんだな。

わしは、鉄生という」

「鉄生さん?」

他人から名を呼ばれるのも久しぶりだ。悪くない。

この子の声も悪くない。

「うん。できれば、なにも付けないで呼んでくれんか。

『てっせい』という音の響きは好きなのでな」

「じゃ、鉄生。今日も泊めてくれない?」

今週いっぱい、家には誰もいないから…」

なるほど。起きてもすぐに帰らぬから何かと思えば、そういうことであつたか。

「わしは構わんよ。ここじゃとて、わしのほかに誰もおらん」

「そう。じゃ、おやすみなさい」

そう言つて、彼女はぱたぱたと部屋に歩み去る。私は、その後ろ姿を見送つてから、床に就いた。

十

二月十六日、晴天。

食事を作るつと台所へ向かう。と、後ろからはぱたと音がした。

「ごはんね。ごはん作るつもりね?」

振り返ると、当然和子くんがいた。私がいまいに頷くと、彼女は手にしがみついてくる。

「ありがと。でも、あたしがやるわ。鉄生は居間で座っててっ！」

ほとんど一息で言ったのではあるまいか？ そう思えるほどの勢いに圧おされてしまった。

どうも、食事を作らせないために待っていたようだ。少し不満ではあるが、昨日の夕食を考えると、まかせた方がよいように思う。

そのうち、よい香りとともに、なにかがやってくる。

「急いだから、トーストと目玉焼きね。おべんともサンドだけど、私とふたり分作っちゃったから、食べて。」

それじゃ、あたしは学校いくから」

ぱたぱたと音を立てて、和子くんは学校へ向かった。最初に会ったときと、ずいぶん様子が違う。あの年ごろは、ころころと表情が変わるものと聞いていたが、まさかこれほどとは思わなかった。

……楽しい。

十一

おべんと作ったから、ちよつと遅くなっちゃった。予鈴といっしょにクラスになだれこんじゃえっ！

つと、その先に知ってる顔がいた。

「わ、ごちゃん、おはよ」

わたたたた！ あたしは、両手でおもいつきりバランスを取って、なんとかぶつからずにすんだ。

「一美しい！ あぶないじゃない」

樹一美ちゃん。あたしの親友。クラスも部活もおんなじ。その一美がくすくす笑った。ひどいわ。いつもは一美の方が遅いのに……

「大丈夫？」

でも、ちゃんと心配してくれるのね。やつぱは休んじやったし……

「うん。もう、すっかり熱も下がったし……」

「ちがうわよ。桂くんのこと」と

「え?」

え…っと、好きなのは知ってると思うけど、まさか、その、チヨコのことまで!?

「つきあい長いんだから、見てりゃわかるわよ。わごは休んじゃうし、桂くんは桂くんでなんか落ち着かないし…そうそう、放課後の部活のときなんか、桂くんスポンジケーキのシチュー作っちゃうところだったのよ」

なんか、桂くんらしい…

「ふふ。桂くんらしいよね。なんたって『めざせ、鉄人』なんだから。おもしろい料理が多くて楽しいな」
一美つたら、しげしげとあたしの顔見るの。やだ。そんな趣味ないわよお。

「わご、なんか…変わったね。ちょっと、明るくなつたような気がする」

「そ、そかな」

言いながら、なんとなく嬉しかった。そう、あた

しにもわかるの。なんか、みんなと話しやすくなつたみたい。こうやって考えてることが、すうっと言葉になるの。嬉しい。

「さては、きのう男と会ってたな?」

「へえっ!?!」

自分でも恥ずかしいくらい、へんな声だしちゃった。な、なに言い出すのよ、いきなり。…そりゃ、たしかに鉄生は男だし、間違つてはいないけど…

「あ、桂くん!」

びくんっ!!

あたしの意思なんかおかまいなしに、首が後ろに向いちゃう。…あれ?

「うっそびよ〜ん」

え? あ! あ〜!!

「か〜ず〜み〜!!」

なんてことすんのよお!

「あはは、ごめんして。…でも、新しい男ができたわけじゃなさそうね」

「そうぼんぼんできないわよっ！」
 べ〜だ。あたしが好きなのは、やっぱり桂くんだけよ。なにがあつても、好きなのは好きなんだもん。いいじゃない!!

席について、授業の準備。かばんを開けて、教科書だして…あれ、なにかある。ピンク色の…これって、あたしの、チヨコ？

そうだ、鉄生から返されて、それから…わかんない。鉄生が入れてくれたのかな？

かばんに隠れて、ピンクのきんちやくをちよっと開けてみる。ちゃんとチヨコがあるわ。それに、紙がひとつ。…達筆だわ。なんて書いてあるんだろ。た…べ…

(与つべき者に与つべし)

…そつだね。鉄生の言つとおりだわ。これは桂くんに作ったものだもん。あたしのこと好きじゃなく

ても、捨てられてもいいわ。やっぱり、あげなきや。「おはよ、和泉さん。風邪、大丈夫？」

びつく〜ん!!

こ、今度は本物だわ。「この声。…だめ。逃げちゃだめ! このチヨコは、彼のためだけにあるの。嫌われたって、あげるの!!」

「お、おつはよお、桂くん。これ、二日遅れたけど、あげるねっ!」

…はあ、はあ、はあ。なんか、クラス中がこつち見てる気がする。少なくとも、一美はこつち見てるわ。恥ずいっ!

けど、いい。もういい。さあ桂くん、なんとでも言つて!!

「やつとしゃべってくれた」

はあっ？

そのときのあたし、まめけな顔してたみたい。あとで桂くんが言つてた。

「だってさ、クラスも料理部も同じなのに、話しか

けても応^{こた}えてくれないんだもんな。

おとといだつて、二ツトリのまねで避けられちゃつたし。てつきり、嫌われてるんだと思つた」

そう言つて、桂くん、一番おつきなチヨコを食べ出しちゃつた。あ、あ、あ。いや、嬉しいんだけど、じゅ、授業はじまるよ!」

「やっぱ、お菓子^{おかし}は女の子が作つた方がうまいや。和泉さん、こんど教えてよ」

あ、こんどは気のせいじゃない。クラスのみんなが、騒いでる。でも、いいや。桂くん食べてくれたし。おいしいつてほめてくれたし。

「そうね。じゃ、料理部で教えつこしましょ!」

なんか、いまのあたし、なんでもできちゃいそつな気がする!!

散歩から帰り、居間の椅子に腰を掛ける。と、頭に声が響いた。

(そろそろ…)

部屋の明かりが暗くなる。いや、部屋全体が、すと溶けるように消えて行く。

いままで、幾度となく経験した、この感覚。このまま座つていれば、黙つて座つてさえいれば、次の場所に向かえる。だが…

「しばらく、留^{とど}まつていたいの。ここに」

溶け続けていた部屋が、ぴたりと止まつた。

しばらくして、再び扉が、たんすが、その姿を取り戻す。

「すまん」

頭の中の声は、もう聞こえてこなかった。

へへ、今日の部活はちょっとおサボりしちゃった。桂くんは、一度はチヨコを捨てたって話したら、鉄生に会いたがっちゃってたいへん。

知らない男のところに泊まったのか、だって。…言われるまで気にしてなかったわ、そんなの。

でも、チヨコ渡せたのは鉄生のおかげだし、結果を見てもらいたいわよね。だから、桂くん連れて、鉄生の部屋に向かっているの。

「和泉さん、こつちにあるの?」

「そうよ。川の近くのアパートなの」

あれ、なんだろ。桂くん、変な顔してる。…まあいつか。もう、その角を曲がればすぐだから—

…えええつ!!

「こ、これ…」

ぼろぼろになった、アパートだったもの…

「だよなあ。たしかこの辺のアパートっていったら、

バブルはじけたときに空き家になった、って父さん言ってたから」

そ、そんな…じゃ、あたしはきのう、どこにいたの?」

頭の中まっ白になった。そのとき、背中から声があったの。

「ほお、今日は二人か」

振り向いたところに、白い着物があつた。

「今晚もうまい飯が食えると思つてよいのかな?」

「…つていつたつて、部屋がないじゃない」

あたしの言葉は、最後がふるえてた。桂くんが、あたしの肩に手を置いて、うなずいてる。

「部屋がない?」

そうよ、あそこ…つて指さそうとして、二人であつと驚いた。アパート…新品の、りっぱなアパートがある—

あたしは、ふう、と息をついた。そうよ、おとと

21 第一回 二月十四日 午後ヨリ小雨

いからずっと驚かされてたじゃない。いまさびーっ
増えたって、どつってことないわ!!

肩に置かれた桂くんの手、その上に、あたしは目
分の手を置いた。

「行こうよ。思いつきり料理できるよ!!」

第二回 三月十四日空ヨリぴえろ

一

三月に入ると、ちょっとだけ、春。

あったかいお陽さまを受けて、ちょっと冷たい空気を押しつけながら、あたしは河原の方に歩いてる
とこ。

ひと月前まで、河原には泣くときしか行かなかったのに、いまは踊りながら歩いてる。ふしぎなかんじ。
二月の十四日。あの日からみんな変わっちゃった。ともだちの少なかったあたしに、ふたりもできちゃったの。

ひとりと同じクラスの桂くん。おなじ料理部で、あたしの好きなひと。その桂くんにチヨコあげるきつけを作ってくれたのがもうひとり、ずっと年上のひと。

とつてもふしぎな、ふしぎなひと。

二

河原のすぐそば、アパートの二階。ここにあの人がいる。ふしぎな人が。

「こんにちはあ、鉄生てつせいいる？」

……あれ？ 誰もいないの？

奥に入ると、大きな人形があった。長い棒をまっすぐにかまえた、人形…

——うづん、ちがう。

「鉄生、何やってるの？」

人形が、動いた。

「おお、和子かずこくんか。

なに、このところ体が鈍なまつておるでな、ちと運動をしておっただけじゃよ。」

そう、この人が鉄生。2 mの体と、顔から見たっ

て30までいってないはずなのに、しゃべりかただけ
がおじいちゃん。

これだけでもふしぎなんだけど、それだけじゃな
いんだよね。

「泊まってゆくのかね?」

「こくん、とあたしはうなずいた。

「このとこ、家におとうさんおかあさんがいない
ときには、いつも泊めてもらってるの。」

「やっぱり、ひとりじゃちよつとこわいから。」

「うれしいのぉ。またうまい食事ができるわ」

「こう言われると、悪い気しないわよね。学校じゃ
料理部だし、ちよつと自信もあるけど、自分ひとり
で食べてるとやっぱりつまらないから。」

「うん、ちよつと待っててね。いま作るから」

「あたしは、たんすからエプロンを取り出して、キッ
チンに向かった。」

もう慣れたからいいけど、ここにはあたし用のた
んすもあるんだよね。エプロンにねまき、それから

下着まで。

必要だから、置いてあるんだって。へつに変なこ
としてるわけじゃないし、いいけどね。…商店街に
買いに行くのだけやめてくれれば。

さあて、何を作ってあげようかな?

三

三月十一日、曇天。

目覚めてまず目に入るのは部屋の風景。次に窓の外
の景色。習慣として、常に確認することになっている。
いつもの河原と、いつもの町並み。変わらない景
色。今日も、私はここにいる。

「おととい昨日の明日は昨日、あした昨日の明日は今日。では今
日の明日は——?」

気がつくくと、無意識のうちに首を振っていた。私
は着替えを済ますと、部屋の扉を開けた。

居間に出て、棒を振り体をほくしていると、和子くんが起きてきた。

「早い。今日は休みじゃろう?」

寝間着のままの和子くんは、なにやら惚けてぼけているように見える。

「うん…なんか、変なの。目がさめちゃって」

几帳面な彼女が、この格好で寢室を出てくるとは。たしか中学二年…十四歳であったか。この年頃の女性には一種一流の勤が働くと聞いたことがある。悪いことがなければよいが。

「どうせ起きちゃったんだから、朝ごはん作るよ。ちよっと待っててね」

…ま、この家にいる限りは問題あるまい。なにかあれば、私がいる。

びろろろろ…びろろろろ…

はて、何の音だろ?…少なくとも私の知る限り、この家にこんな音を出すものはないはずだが…

考えていると、和子くんが走ってきた。

「ごめん、あたしだよ」

おたま片手に寢室に駆け込むと、何かを耳にあてて歩いてきた。それに向けて、なにか語りかけている。

(携帯電話)

頭の中に響く声。そうか、遠話の一種か。しかし、線が見えない。

(携帯電話)

わかったわかった。

こやつは色々教えてくれるのは良いのだが、頭が固くていかん。一生の付き合いだから、我慢しなければならぬのだが…

「お父さん、足折っちゃったの!?!」

和子くんの大きな声が響く。どうやら、まわりのことがわからないほど驚いているようだ。

「でも、一美のお父さんって、マジシャンでしょ。舞

台は？」

マジシャン？…ああ、奇術師か。先に居た町ではかなり大きな奇術師集団がいたようだが、いまでもいるとは思わなかった。

「代わりつて…そんなすぐみつかるわけ…あ！」

和子くんの目が、私の顔を捉えた。なにか、いやな予感がする。

わざとらしい笑顔を作つて、彼女は台所へ向かいながら小声でしばらく話を続けていた。そして、電話を握り締めながらこちらにやってくる。

「あの…鉄生？お願いがあるんだけど…」

『お願い』の内容は、聞く前から見当がついた。

四

親友の一美といっしょに、一美のお父さんの病院へ行った帰り道。あたしは、『まじつくびえろ』によつてみた。

一美のお父さんも参加してる、ちょっとは知られたマジシャングループ。全国をまわつて、マジックを見せてるんだ。

あたしと一美は、小さいときから仲がよかつたから、よくここにも顔を出してるの。たまにだけど、料理部で作つたものを差し入れることもあるから、この人達はみんなあたしを知ってる。

スタッフ用のちいさなとびらを開けたら、舞台の方がざわざわしてる。上履うわはきにはきかえて、そでからちよこつと頭を出すと、大道具の山橋さんがいた。「よう、和ちゃんか。すごい人連れてきたねえ」

へ？なんだろ。連れてきたつて…鉄生のこと？山橋さんが後ろ振り向いた。あたしもつられてそつちを見たら——

ひゅんっ！

な、なに？なんか降つてきた!?

よくみてみると、白いマットの上に人…アクシオンマジックが得意な岩井さん。それを押さえるように棒があつて…棒の先にはやつぱり人。

白い和服に大きな体。でも…顔はピエロのお面でわからない。

「お見事。武術の心得がおありのようじゃのあ」

やつぱり鉄生の声だ。なんでお面なんかつけてるんだらう？

「一体、なにやったの？」

質問してるつもりじゃなかったんだけど、山橋さんが答えてくれた。

「いや、棒でね、岩井くんを放り上げたんだよ。それも4mくらい」

よっほどびっくりした顔してみたみたい。横からやってきた男の人が、あたしの顔を見て笑ってる。

『まじつくびえろ』リーダーの神林さん。タバコのけむりを、上に向けて吹き上げてる。あたしたちが来てるときだけなんだって。

「本当に、助かるよ。樹くんが足を折ったときにはどうしようかと思つたんだが、これならなんとかなりそうだな」

そこで舞台の方を向いて声を大きくしてた。

「鉄生、と言つたね。他になにかできるかい？」

鉄生は棒を肩にかついで、ちよつと考えてるみたい。でもすぐにもともどる。

「そつじやの、和子くん、手伝つてくれんかね」

あたしは鉄生に言われるまま、舞台の真ん中に出て行った。

マネキン人形の前に立つて、つて言われてその通りにしたけど、何をやるのかぜんぜんわからない。人形の後ろにマットを縦にして置いてるし、ほんとに、どうする気なんだろ？

考えてると、鉄生が近づいてきて、あたしの耳元でこつそり言つた。

「ちと怖いかもしれんが、信用しておくれ」

そのまま二歩下がると、棒を大きく振りかぶる。

あたしは、緊張してまってる。

信用は…してる。けど、やっぱ、こわい。

びゅんっ！

思わずおなかにぎゅっ、と力入れちゃったけど、棒はあたしの腰のあたりを通過して…通って…そのまま、反対側にいつちゃった!?

どんっ、という音で振り返ると、マネキン人形がマットにめり込んでる。

え？あれ？

「す、すごい」

『まじつくびえろ』のみんなが、あつけにとられてる。

神林さんなんて、くわえてたタバコがくつの上に落ちてるのにも気付いてない。…でも、そりゃそつよね。ふしぎなこと見続けてるあたしだって驚いたもん。

「これ、使えますよね」

「うん、単独じゃ難しいけど、なにか筋を作れば…」

みんなが、舞台のことを話しはじめた。

鉄生が、あたしのそばに寄ってきた。棒を軽く振り回して、調子を見ながら。

「面白かったかの？」

そう言うてにっこり笑ってる。ピエロのお面があってもわかるくらい。

あ、なんとなくわかった。あたしが落ち込んでるの、ばれちゃってたんだ。

一美のおとうさん、ケガが思ったよりひどかったんだ。完全には治らないかも、なんて言われたみたい。

鉄生には言いたくなかったんだ。ここんとこ、あたしはほとんどいそ、う、うだし…でも、ばれちゃうのか。やっぱり。

それでも、あたしは笑ってみた。うん。とりあえず楽しんじやったし。でも、なんて答えたらいいか

わかんない。顔は笑ってたけど、あたまの中はおおあわて。とりあえず、いまのマジックのこと。マジック…ん？

「あれ、マジックじゃないでしょ」

思わず口にしたしてから『いけないっ！』と思うちゃった。せっかく気を使ってくれたのに、変なこと言ってる。あゝあ、あたしのほか。

でも、鉄生は『エロのお面の下でにゅと笑ってた。さっきの『にっこり』じゃない。なんかたくらんでるみたいなかおで…

「まあのお。隴斬刀ろうせんとうという古い刀術じゃよ。ま、今では奇術というても通じるじゃろ——」

五

「隴斬刀!? まさか、いまじゃ本の上だけの技のはずなのに…」

その瞬間から、三蔵を救すくける孫悟空は、僕にとっ

て猿面をした怪しい男になった——

最初は、単なるリフレッシュのつもりだったんだ。書き物のネタにつまったので、ちょっと一休みしようと思ったのが、このマジックショーだったってだけ。

以前、やはりネタにつまったときに参考にさせてもらったことがあるんで、迷わずここへやってきたんだけど、お目当てのマジシャンはケガで休み。

あとはただ情性で見続けているだけ。そんな中、この男の番がやってきたんだ。

妖怪に襲われた三蔵法師を救うため、孫悟空が変化へんげした大柄な猿面の男。妖怪たちを棒で投げ飛ばしながら親玉へと向かう——

…シヨーとしてはよくある話だな。棒を使う腕前はといい、誉められてもいい動きだとは思っが…僕はマジックを見に来たんだぞ。

そのうちに、クライマックス。三蔵を人質に、棒を捨てさせようとする親玉。悟空は思いきり棒を振りかざし、三蔵ごと親玉を吹き飛ばす…かと思つたら、棒は三蔵を通りすぎ、後ろの親玉だけをなぎ倒した!!

見間違いない。あれは僕の知っている技だ。名は『臙斬刀』――

客席の後ろから、京劇風の衣装に身をつつんだ人たちが風船を持って入ってきた。風船に描かれているのは、鬼の顔らしい。膨らませすぎてそう見えないうものも結構あるけど。

前列の客の幾人かが、風船を持たされる。持った客は腕を高く上げるように言われているらしい。風船が行き渡ったところで、舞台の猿面男は手にした棒を大きく突き出した。その先で、風船がはじける。

左前の風船がはじける瞬間、僕は感じた。あの男

は、風船に『あれ』を当てている。客が危険な目に会わないように、注意しながら…

僕の右前の女性は、ひざに抱いた子供にねだられて、風船を手渡していた。差し上げられた子供の腕。風船は母親の顔の付近。

猿面男がその風船に的をしぼる。『あれ』を打ち当て、はじけた風船が、母親の顔を打ちつけ…はしなかつた。そむけた顔のすぐ前で、勢いのついたゴムがなにかに弾き返された。

間違いない。

二セの孫悟空に拍手を送る人々の間を擦り抜けて、僕は楽屋へと向かった。

知らないうちに、思いが言葉になる。

「あれは、マジックなんかじゃない…」

「あ、きみ、今の舞台で孫悟空やった人、誰だか知らないかい？」

学校が終わって、『まじつくびえろ』の楽屋へいく途中。背中から声きたからちよつとびっくり。

『孫悟空』って、たしか鉄生の役だよな。

やっぱり面白かったのかな？ そう思つと、なんとなくうれい。

でも、ちよつとだけくやしいな。料理部サボつて早くくればよかった。

あ、いけない。答えてあげなげや。

「あ、鉄生ですね」

このひと、背はあんまり高くない。あ、でも最近、鉄生見慣れてるから…ちよつと高めに見てあげなげやね。

歳は二十歳過ぎくらい。大学生には見えないけど、会社に行つてみたいにはもつと見えないな。

「てつせい？それって、どんな字書くの？」

あたしはポケットからメモ帳だして、書いて見せてあげた。

そしたら、いきなり、

「テイエシオン！」

おもわず目を見開いちゃった。なに？なんなの、このひと…

「岳 鉄生……まさか、こんなところにやってくるなんて——!!」

『こんなところ』で悪かったわね。…でも、なんとなく気になる。

ふざけるよつには見えないし——

それで、楽屋まで連れていってあげることにしたの。

「テイエシオン
鉄生さま——」

楽屋に入ったとたん、男の人が大声を出したの。両手の指を組んで前に突き出したりして、へんな格好。その手の先で、鉄生がふりむいた。あのお面のま

んま。

顔はわからないけど、目がちょっとこわい。いままで見たことない目だわ。

「なにか、勘違いしてはおらんかね。わしは鉄生てつせい。それに、『さま』なぞ付けられる覚えなどないがの」

あの男のひと、ずっと近寄って、しゃがみこんじやった。

鉄生と、目線を合わせてるのね。

「先ほどの舞台を見ました。…風船の手前すれすれで光を破する…常人には出来ない技ではありませんか」

「奇術じゃてな、常にタネはあるものじゃよ。お前さんには、どうやらわずかにそれが見えた。それだけのはなしではないか」

そう、奇術…マジックだよ。鉄生がいつもよくやってる、ふしぎなマジック…

「では、あの子供の風船はどつ説明しますか！人の顔の直前で割れた風船、顔に当たる前に、なにかに弾き飛ばされていた！このようなこと、奇術などで

はとても…」

「絶対にできぬとは言えまい？わざとやったのじゃと言え、それまでであるが」

男の人が、がばつ、て音がするくらいの勢いで立ち上がった。

あたしもおもわずのけぞっちゃうくらい。でも、声が低い。

「そこまでおっしゃるのなら、一つお答え下さい。

あなたは、お何歳いくつのですか？あなたのお生まれになった年は？そして…今はいつたい何年の何月ですか！？」

だれも動かない。空気が痛い。張りつめている、つてこついつのね。ほんと、「しーん」、って書き文字が浮かびそうなくらい。

「…なるほど、わしの負けのようじゃな。たしかに、その問いには答えられぬわい」

どういう…ことなんだろう？あたしにはぜんぜんわかんない。自分の歳も、生まれた年も言えないなん

て…まえからふしぎな人だとおもってたけど、それどころじゃないみたい。

きつと鉄生は、ここにいてこと自体、ふしぎなんだ…

七

夜の病院

今日は三月の十二日。入院して二回目の病院の夜は、まだ慣れない。これまで、体が丈夫なことだけがとりえだったからな。

まあ私は根っからの仏教徒だから、キリスト教の系列病院というのが肌に合わないのも一因かもしれないが。

食事はまずいし、やることもない。まあ愚痴（ぐち）つてもしかたないから、新しいマジックを考えたりもしたけれど、いつまで続くかはつきりしないのではないやになつてしまう。

いろいろ思いを巡（めぐ）らせていると、扉の外から声が聞こえた。巡回（くわんかい）だろうか？

「個室（こくしつ）だそうですね。たすかりました」

「無用の騒（さわ）ぎは起こしたくないからの。…樹（い）と。ここか」

どうやら、巡回（くわんかい）ではないらしい。静かに、扉が開く。

「折（ひ）つたのは、右足（みぎあし）じゃったかの？」

「ええ…でも、念（ねん）のため——」

「わかつておるよ」

入ってきたのは二人の男らしい。口調（くちやう）からすると、一人は老人（らうじん）か。それにしても声には、りがありすぎるが…ともかく、話の内容（りやく）から考えて、危害（いかり）を加えるつもりはなさそうだ。なにをするつもりか、しばらくやらせておこう。

「お主（ぬし）がいてくれて助（たす）かったわい。わしはそつちのほうはとんと苦手（くで）での」

「そのかわりケガをしないでしょ。寂老（せきらう）のお言葉

「じゃありませんけど、『薬草は使わずに済むのが一番』なんですよ」

そのうち、布団の裾がめくり上げられた。片目だけ明けて見てみたが、どうやら老人の口調をした男が、ギブスの上から右手をあてているようだ。

左手は脇の若い男の手をとって、眠ったかのよう目を閉じている。

「ふむ。右足以外は大丈夫そうじゃな。あちこちの肉に少し血がにじんでおるが、それもあらかた消えかけておる」

で、右足じゃが…ほう…なにかで無理に骨を止めておるな。ずいぶん派手なことをするのぉ」

「しかたありませんよ。これだけ砕けてちゃ、ほかに方法がありませんから——普通は」

老人口調の男が、二三度肯いていた。

「では、頼むぞ」

若い男の手が、折れた足の上ですつ、と降ろされた。何も感じない。なにかの麻酔をつかったのか、触

れていることさえまったくわからない。

「とりあえず、このくぎを…」

からん…

床に、なにかが落ちる音。

「ほ、こんなもので骨をつなぐのか。これは、体によくはないの」

あいかわらずはりのある声が、老人の口調を紡ぎ出している。

骨をつなぐ、ということとは…今落ちたのは骨の止め具なのか!?

「これでも、医療はずいぶん進歩しますよ。なんといつても、私達がやっていることがなんなのかが、わかるようになりはじめてますからね」

私は顔だけでも上げてそれをみようとしたが、なかなか思うようにいかない。いまだ、声一つすら出せないのだ。

「軽くですけど、つないでみました。どうです?」

もうひとつの男の手が、再び足に触れる。
 「うむ…太い骨は形になっておる。このまま仕上げてもよかる。」

…ん？脇の細い骨、ちとずれておるぞ」

そばの男が、あわてて手を握って考え込んだ。

「合わせるだけなら、わしがやるつかの？ 見える分、お主よりうまくいくじやろ」

何の話をしているのか、だんだん考えたくなくなってきた。

見える？合わせる？つなぐ？——何を!?

混乱する頭が冷めはじめたころ、足に違和感を感じる。火照りほてというか、熱を感じるのだ。しかし、寝る前に感じていた痛みはまったくない。

…さてよ、感じるということとは…

「き…き、み…だ、れ——」

やはり、まだまともには口が開かない。それでも、男たちはこちらを向いた。老人の口調をした男…見なれたピエロの仮面が、私の顔を覗きこむようにやっ

てくる。

「あ、夢じゃよ」

「？」

その口ぶりがあまりにもあつ、けら、かんとしていたので、私は二の句が継げなかった。

「夢で納得できんのなら、奇術でもよいがの。一応じゃがタネもあることじゃし」

脇から、若い男…やはりピエロの面がひよいと顔を出して言った。

「右足の熱がとれるまでは、おとなしくしてくださいよ。」

明日があさつてには普通に歩けるようになりますから」

信じられない。やはり、治したというのか？ 医者からも、完全には無理だと言われたのに!?

「きみたちは…誰なんだ？」

ようやく舌がまともに動きはじめた。

「そうじゃな——この病院風に言つと、天人の弟子

「じゃから…天使かの」

仮面の下表情までは見えないが、私には、老人口調の男がにやつと笑ったように思えた。

そしてそのまま、私は眠りについた…

翌朝、おはようございます、のあいさつと共にやってきた看護婦が、私を見て腰を抜かした。

「い、い、樹さん！どうやって、あ、歩いて…!?!」

そう、私はもう歩いていたのだ。きのうの夕方には、一人で起き上がることをさえできなかったのに。

夢ではなかった。あまりにも不思議だが、かれらは本当にこの部屋にいたんだ。

私は、まだ腰を抜かしている看護婦に向かって言った。

「きのうの夜、天使が来たんですよ。

ちよつと、ムサイ天使がね」

八

「ねえ、一美のお父さん、きょう退院できるんだって！」

あたしは、そう言いながら鉄生の部屋に飛び込んでいった。

部屋の中には、鉄生と…きのう楽屋に鉄生をたずねてきた人。

「あ、お客さまいたのね。ごめんなさい」

二人が同時に手をふってる。

「構わぬよ。ああ、こちらを紹介しておこうかの。昨日知り合いになった、了くんじゃ」

ぺこ、って頭を下げる。そっか、すっかり仲間になっちゃったのね。

「ところで和子くん、樹さんが舞台に戻られるのはいつになるのかの。恐らく知つとるんじゃないやろ？」

もつちろん、あたしはそれも聞いてた。

「それが急でね、明日からなんだって。もう一日で

もはやくマジックがやりたいから、って」

鉄生がちよつと考えこんだ。しょうがないわよね。代役だから、一美のお父さんがくれはおしまいだもん。

「そうか…了くん、明日の舞台、ちと手伝ってはくれぬかのぉ」

「鉄生どのの頼みとあれば…でも、僕には奇術の心得（こころえ）なんてありませんよ？」

了つていう人は感じはいいんだけど、ちよつと気弱みたい。

「わしに合わせてくれればそれでよいて。退院祝いじゃてな、思い切りいこうかの！」

にやつ、て感じで笑つ鉄生を見て、了さんが青くなつてた。…なんで？

「賭けに…なりますよ」

「だてに長生きしとらんよ。」

大丈夫、それだけの価値のあるお人じゃて」

その言葉で納得したみたい。了さんはそのまま返つちやつた。

でも、あたしにはわからない。いったい、なんの話を話してたんだろう？

「和子くん」

おもわず飛び上がつちやつた。それだけ、考え込んでたのね。

「明日は三月の十四日じゃな。なんでもちよ、これいとうをもらつた男はお返しをする習わしだそうじゃと、これに書いてあつたが」

…つて言いながら見せたのは、女の子むけの情報誌。あたしが置いていっちやつたの、読んでたのね。

「あ…べつに気にしなくていいの。あれは無理言つて食べてもらつたんだし…」

「明日、のぉ。あの子…一美くんのお父上が戻られるなら、わしの出番も明日限りじゃろうし、あの子を連れて来てはくれんかの？」

なんか、あたしの話は聞いてない、つてかんじ。

「それは、もちろんいいけど…？」

「いまのわしに出来る贈り物をあげるでな。ちゃんと受け取っておくれ」

九

舞台上、二人のピエロがとびはねてる。

一人はおっきなピエロ。もう一人はちよつと小さなピエロ。

鉄生と、了さんの舞台だ。

了さんピエロがちよこちよこ動くたびに、鉄生ピエロの持ち物を消してく。ほんとに消えちゃうの。ちよつと布でさわつただけで。それも、どんなものでも！

花や花瓶は他のひともよくやってるの見たけど、それでも了さんピエロはものすごく速い。ぱつ、とさわつて布を上げたらもう消えてるんだもん。それだけじゃないの。いすにテーブル、本棚まで、布で隠しさえすればなんでも消しちゃうんだから。

これに怒つた鉄生ピエロが、了さんピエロを追いかけて、かけ回つておさわぎ。

舞台のそでに引つ込んだかと思えば、客席のまんなか。わきのとびらにいたかと思えば、舞台のしたからひよい、つと出てくる。

それもこの音楽…え、つと…たしか『グレン・ミラー物語』って映画で使つてたテンポのいい曲。これにあわせて出たりひっこんだりしてるの。

もうみんなあつけに取られちゃつて、開いた口をしめるひまがない、つてかんじ。

最後は二階の客席から舞台まで、ロープもない空中を階段でもあるみたいに上がったたり下がったりの追いかけて。

やつとつかまえた鉄生ピエロが、舞台のまんなかのロープにつかまっていると、上から降つてきたのはカーテンみたいな大きな布。

布が通り過ぎたあと、二人のピエロは影も形も…

「すごかったね。いまの」

一美がうなずいている。いつししょうけんめい笑っている。けど…目が笑ってない。

そうよ。だって、これからお父さんの出番なんだから。その前に、こんなにすごいもの見せちゃったら、お父さんが目立たないじゃない!!

あたしは、なんとか一美をなだめようと口を開けた。

だいじよぶ、心配ないよ。おとうさんりっぱなマジシャンだもんね。にわかじこみの人たちとはわけがちがうよ——

言えない。言えるわけじゃない!ひと月前からふしぎなこといっぱい見てるあたしだって、びっくりするくらいのマジックなんだもん。

ひどいよ、鉄生。そりゃあたしにはプレゼントになるかもしれないけどさ、一美には…

「あ、はじまる」

一美の言葉ではっとした。

あわてて開けっぱなしの口を閉じて、舞台…あ、一美のおとうさんだ。

まえに舞台を見たのは、ずうつとまえ、小学校の三年くらいのころ。差し入れにきたとき、練習なんかはよく見るんだけど、あたしも一美も、本番はあまり見ない…っていうより、見せてもらえないの。

ちゃんとお金を出さないと、ほかのお客さまにもうしわけない。って言ってたっけ。一美のおとうさん、けっこう頑固なのよね。

でも、いまでも覚えてる。手の中からいろんなものが出ては消えてくの。ちようちよとか、お花とか…「かわらないね」

一美がとなりでうなずいている。

舞台にあかりがともっても、まわりがざわついてる。みんなまだ、鉄生の舞台の興奮が残ってるんだ。流れているはずの音楽まで聞こえないじゃない。一

美のおとうさんは、もうおじぎをして、シルクハットをぬいでるのに…

え？

いま、なにか目の前を通ったみたいなの…

ほら、また！

気がつくのと、まわりりがしん、としている。さっきまでザワザワいってたのにね。

そういえば、音楽も流れてない。聞こえなかったんじゃないかって、最初から音楽流してなかったんだ。でも、なんで？

舞台がさつきより、すこし薄暗くなってる。そのなかで、マジシャンが大きく手を振ってる。一つ手を振るたびに、きらきら光るなにかが、こっちにやって来てる。

あ、また目の前に…

「ちようちよ…」

となりで一美が言った。ほんと、ちようちよだわ。光ってるちようちよが、いくつもいくつも、私たちの上を飛んで行く…

「見てー！」

舞台ではマジシャンが、光ってるちようちよを床に散らしてた。

それから、ふしぎな手の動きではいつ、と床をはくようにすると、とたんに床じゅうが花ばたけに変わっちゃった!!

ピンクや黄色やうす緑。きらきら輝く、光のお花ばたけ…

「きれい…」

おもわず、口に出ちゃった。横で一美がにっこり笑ってる。

「うん。わたしのお気に入りのマジックなの。これ。むかしは公演から帰って来ると、うちで必ずやってくれたんだ。これさえやれば、機嫌がとれると思ってるのよ。まったく」

そうよね。一美の大好きなマジック…あたしだつて、見たことないわけじゃないのに、なんか、はじめて見るみたいにしてき。ほんとに。

舞台が終わったのにしばらく気がつかなかった。なんか、ぼーっとしちゃう。みんな夢みたい。

シルクハットを胸にあてて、深くおじぎをしていゝるマジシャンに、みんなが送った拍手はものすごく良かった。そう、鉄生のときよりずっと、ずうっと。

「やっぱり樹さんはすごいね」

「ほんと。さっきのはびっくりすゝくてもヒロつて感じだったけど、これぞマジックっていうのかなあ。風格よね」

あっちこっちで、みんながほめてる。

そっか。鉄生、わかってたんだ。派手にすればするほど、マジックじゃなくなっちゃうってこと。一美のおとうさんがほんとのマジックを見せてくれるじや。

そっか。そっかあ。うたがってごめんね、鉄生。それで、一美を連れてこいなんて言っただね。

三月十四日のプレゼント。ほんとにもらったのは一美みただけど、ま、いっか。

「お花、持って来たんだ。父さんに届けにいってくるー」

一美が笑ってる。心の底から笑ってる。明るくて、あったかい。見てるあたしまであったかくなっちゃう。あたしの好きな、あたしの親友の笑顔。

走ってくうしろ姿。まだ、あの笑顔が見えるみたい。

あたしへのプレゼントって、もしかして――

第三回 三月廿六日 暫シ休業

一

三月も半ばを過ぎました。

筮竹（ぜいちく）を構えて見る街は、まるでまぼろし（まぼろし）のようです。

歩く人々の多くはあいまいに笑い、妙にはしゃいでいるようにも、また疲れたようにも見え、以前私
が知っていたものとはまるで違っています。

たまに目の前の席に腰かける人。その口からこぼれるのは他愛（たあい）のない愚痴（ぐち）のようなものばかりです。

脇（かたわら）の鞆（たもと）からちらちら覗くのは流行（はやり）の雑誌でしようか。この程度の愚痴なら、そこにある似非（エッセ）占星（しんせい）で十分でしょうに。

私は思うのです。もう私は…本当の占術師は、この世に要らないのではないかと。

二

もうちょっとすると春休み。

あつたかくなつたから、きのうからポニーテール。雨上がりの湿った風が、首すじにあたつてくすぐつたい。

料理部のない日。あたしは学校が終わると、いつもの通り川沿いのマンションに歩いていった。今日は桂くんもいっしょ。…のはずだったんだけど、川が見えたらういで用事を思い出して帰っちゃった。ちょっとがっかり。

きのうの雨のせいで、川に近づくとザーっと音が聞こえてくる。

ここから先は舗装してないから、足元にも水たまりがいっぱい。泥水がはねちゃわないように、そおつと歩いてく。

あのマンションには、男の人が住んでる。名前は鉄生（てつせい）。2mくらいある大きな人だけど、いつも白い

着物を着て、若く見えるのにおじいちゃんみたいな言葉で話すひと。

あと、たまにもつ一人。了さん^{りょうさん}、つて呼んでるけど、この人はあんまり大きくない。でも、大きすぎる鉄生がそばにいるから、ほんとは普通の背丈なのかも。いつもは文章を書いている人なんだって。切はぜつたい破らないけど、そのかわりけっこう好きなことしてるみたい。

「こんにちわあ」
マンションに着いたあたしは、いつもの通りドアから飛び込んだ。

カタン

あれ？ なにか足に当たったみたい…
そう思った瞬間、何かが飛んできた。

「あぶないッ！」
大声といっしょに、横から別の何かが飛んできて、ぶつかった。

横から来たのは了さん。その顔が、ひしゃげてる。口からは真っ赤な血。そして…胸には大きな手がめり込んでる…!!

「あ…いやああ!!」
あたしはただ叫んでた。なに？ なに？ なんなのこれ!?

大きな手の先では鉄生が、手を伸ばした形のまま銅像みたいに固まつてる。

「ヒッ…ぐ…」
了さんは胸に手をあてたまま、声にならない息づかいであえいでる。

あたしはその間でおろおろするだけ。どしたら…了さんと鉄生をかわるがわる見て、どうしようか考えてる間に、了さんの息が大きくなった。

「…ツくあ。はあ…——ふうっ」
水。そう、とにかく、おみずだわ。

あたしは台所に走って、何でもいいからつかんで蛇口をひねる。なみなみとたまった水を持って、了

さんのところへ。

「おみず！」

了さんにそのまま渡そうとして、はっとした。

あたし…雪平ナベに水入れている…

けど了さんはちよつと笑っただけで、受け取って飲んでくれた。ハンカチを濡らして、口から青いシャツの襟首えりくびについた血を軽く拭いている。基本的にやさしい人なのよね。この人は。

すぐに立ち上がろうとしたから、手をかしてあげる。

「ああ、ありがとう！」

つて了さんの手があたしに触れたとたん…

「熱っ！」

すこかった。コンロに手を入れたみたいに熱い！

あたしが振りほどくまえに、ぼつ、と了さんが手を放した。

熱かったところを見たら、何か黒いものが見えたと思っただけで、すぐまた了さんの手がそれを隠

しちゃった。

なんで？

「悪い、すぐ治なおるからね」

そう言いながらなでた手のはなれたら、そこにはなにもなくなつてた。

でも、いま熱あつかったのはたしか。それにいま…『すぐ治る』つて言つたよ…ね。

ううん。考えるのはあと。

「大丈夫、了さん？」

了さんは立ち上がつて、黒っぽいジーンズをポンポンと叩いてた。

「ああ。きみのおかげでね」

え!?

あたし、目を丸くしてたみたい。了さんが顔をそらして小さく吹き出してるから。

だつて、ねえ。

「いや、ほんとだよ。きみが咄とつ嗟さに叫んでくれたおかげで、鉄生てつせいどのが正気かえに還かえつたんだ。あのまま双寸そうすんけい経

でも打たれたら、私だって治すヒマもなくてイチコロで…」

『はっとする』って、「ついついのを言っただわ。それがよくわかるくらい、了さんは『はっと』してたでも、なんで？」

「了さん？」

「ああ、いや何でもない。ところで…きみはここに一人で来たのかい？」

「うん、そうだよ。途中までは桂くんも一緒だったけど、川のすぐ手前で急に用事を思い出しちゃって、それで…」

あ、また考えてる。あたしの話聞いてないわね。

「それが普通だ。なぜこの子だけ…？」

え、いまなんていったんだろ？　なんか妙な感じ。大事なことを聞きそびれたような…ちょっと考えてたら、了さんが

「入り口に書きつけを置いておいたんだけど、見なかったかい？」

なにかあわてた感じで言ってる。

あたしはさつき蹴つちやっただ板を持ってきて

「これ？」って訊いてみた。何かごまかしてる、ってわかる。けど、聞いちゃいけないことなのかも…「そうそう。ほら、立ち入り禁止って書いてあるだろ？」

よく見ると、たしかにそう書いてある。でも…あんなとこにちょこん、とあるだけじゃ、わかんないわよあ。

「実はね、鉄生どのが久しぶりに拳の稽古をしたいそうだから、相手をしていただけだ…」

あ、そう言えば鉄生わすれてた！

いつもの白い着物を着た鉄生は、なんかぼおとした感じで、自分の手を眺めてた。

この前から、なんか変。最初に会ったころはよく笑ってたのに、いまはずっと考え事してるみたい。

…そんなに悩んでるんなら、言ってくれればいいのに。

「やっぱり私じゃ力不足のようですね。知り合いにかなりの使い手がいいますから、明日まで待つて下さい」「
了さんの言葉にも、鉄生はちよつとつなずいただけだった。

あたしはなんかもやもやするけど、とにかく自分でできることをすることにした。

さあ、お料理、お料理!!

三

今日もこの場所から、笹竹越しに街を眺めています。生きて行くには働かねばならない、とはいえ、いつまでこうしているべきか…

「そろそろ潮しほですかな」

言葉が聞こえたのではつとして顔をあげましたが誰もいません。

意識せずに口からこぼれてしまったようですね。占術師としては危険です。

念のためあたりを見渡しましたが、もちろん誰も聞いていません。

もともと人通りのない道です。息をついてまた下を向きますと、

「暇そうですね。赫かくさん」

と声がします。ぎよつとして顔をあげると、見知られた顔が待っていました。

「了くんですか。これはお珍めづしい」

ジーンズにだぼだぼのコートが、痩せた体にはよく合っています。コートから突き出た手には、貼りつくように薄い黒の手袋…

「おや、また手袋をつけはじめましたか」

思わず私が口にする、彼は顔をほころばせて

「また、人と会うようになったから…」と言います。

私も微笑うなずんで肯うなずきます。彼が人を避さけるようになってもう三年。文筆業という仕事柄、人と会わなくても暮らしてゆけることが、かえってまずかったのでしょうか。一時は私も説得したのですが、今では

私の方が、占術師として人とかかわることを疎^とみはじめているとは、皮肉なものです。

「暇だったら、一緒に来ませんか？ 会わせたい人がいるんですよ」

今度の笑みは悪戯^{いたずら}をしかける子供そっくりでした。私は机の前に『臨時休業』の札を下げると、脇に置いてある杖を取って、彼のあとを歩いて行きました。

四

連れてこられたところは、川沿いにある小さなマンションでした。やけに人通りが少ないですが、その理由はすぐにわかりました。

と、いうことは、この住人は…

ドアを開けて中に入ります。目に飛び込んでくる印象的な巨体。そのくせ白い着流しがきれいに合っています。それは体の線が動きやすく作られている

証拠

私には、見た瞬間にわかりました。この方が誰なのか。そして、了くんがなぜ私を連れてきたのか。

「はじめまして、鉄生先生」

握った両手を前に突き出して礼をとります。この方に通じるかどうかはわかりませんが、私なりに礼を尽くしたいのです。

ほどなく、鉄生先生も同じように礼を返して下さいました。

「とりあえず、その先師とかいうのはやめてくれんかの。わしはそんなに偉い人間ではないて」

「は。では鉄生さま。初めてお目にかかります。

私は…」

とあいさつの言葉を口にかけてふと周りを見ると、女の子がいます。まさか、この子も…なのでしょうか？ それにしては、あまりに普通の女の子です。見た目でわかるかどうかはさておき、服装もごくありふれた紺^{こく}のブレザーですし、背丈も長めの髪も、特

に変わっているわけではありません。

たしかにこういうことは、女性の方が馴染みやす
いとは聞きますが、それにしても順応性が高すぎは
しないでしょうか…

「えと、どなた…ですか？」

女の子が口を開きました。可愛い声ですが、やっ
ぱり普通の女の子に見えます。

「ああ、彼は僕の知り合いで、赫^{かく}っていうんだ。赫さ
ん、こちらは鉄生^{てつせい}どのの知り合いで、和子ちゃん。中
学生だよ。」

「中学生…普通の、ですか？」

しっかりと顔^{うなず}く了くんを見て、私は愕然^{がくぜん}としました。
普通の中学生が、なぜここに居られるのでしょうか!!

五

中学生、中学生って、うるさいわね。

そりゃ、おとなばっかりだし、鉄生とあたしを比

べたら変な組み合わせなのはわかるけど、その何度
も言われるとなんかムカつとするわ。

「カクさん？」

言ってみて、なんか可笑^{おか}しくなっちゃった。これ
じゃ水戸黄門よね。

了さんもそれに気付いたみたいで、こう言ったの
「ああ、そりゃ字が違^{ちが}うよ。赫は赤^{あか}って字を二つ並
べたような字でね、『光り輝く』っていう意味さ。」

へえ。『光り輝く』かあ…

「いや、そういう意味じゃなくなつてね。」

そういうつもりじゃなかったんだけど、なんと
く、目が頭にいつっちゃった。失敗。

「まあまあ。もう二十年もしたらわかりませんよ。」

この人も、どっちかって言つとおじいちゃん言葉。
だけど、鉄生より歳に合ってる、って言ったら失礼
かな？

やっぱり着物だけど、こっちは青黒い袴^{はかま}(あわせ、っ
て読むんだよ)に袴。なんとなく、時代劇の易者さ

んみたいなかっこうだよ。杖も持ってるし。

「で、お主ぬしが何者かをまだ伺うかがっておらんが…」

あ、鉄生てつせいいたのね。

大きな体のくせに、こっやってしゃべると、いつのまにかいないような気がしてきちゃっ。え、とそうそう『存在感』が薄いよな。

うっん。前より薄うすくなったような気がするの…気のせいかな？

「とりあえず、手合あわせてみてはいかがですか？ そのために連れて来たんですから」

了りょうさんが、なぐんか企くんでるみたいにな、や、や、笑わってる。

赫はくさん、だっけ？ が薄はい羽織はおりを脱ぬいで、たすきをかけた。了りょうさんは部屋のテーブルを隅すみのほうに方かた付けてる。

あたしも仕方ないから、そのへんに散ちらかってた本や雑誌を隅すみに寄よせることにした。

片かたづけが終わおわって気がつく、鉄生てつせいと赫はくさんが部

屋やの真まん中ちゆうに向むかい合あわせに立たってた。

え、あれ、これって…

びっくりした。大きさは違ちがうけど、まるで鏡かがみに映うつしてみた。二人の手の動き、足の形、よく格闘かくとうゲームで言いってる…そう『型』！ 型かたがびったりおなじなの！

赫はくさんがひょい、っと手を伸のばして…それからがスゴかった。部屋へやの大きさを忘われてるんじゃないの、って思おもうくらい動き回まわりながら、二人とも打うったり蹴けったり。

こういうのよく知らないあたしでも、スゴいってわかる。だって、ちっとも止とまらないんだもの。プロレスだつて空手くわての試し合あいだつて『間合まあいをとる』なんて言いってじじっとしてることがあるけど、それがないの。止とまつたらやられ放はな題だいになつちやうのがすぐわかる。

もう一時間いちじかんも経へったかな、って思おもった頃ころ（あとで見みてみたら、たたった数分すうぶんだつたけど）、二人ふたりが相手あいての右

手をピタッ、て押さえる形で止まった。

そのまま二人して大笑いしてる。

マンガの中だけかと思ってたけど、やっぱりあるんだ。こついうことも。なんとなくわからないこともないんだけど。

あたしの知らない、あたしにはわからないところで、お話してるんだ。…なんか、いやだな。

あたしは、なんか見ているのがいやになって、台所に歩いていった。

鉄生だけだったときには、あんまり感じなかった。

でも、さんと会ってから、ときどきこんなふうに思うことがあるの。

みんなは、あたしとは別の世界にいる。すぐそばにいるのに、別のことを考えてる。何かに悩んでいても、あたしには話してくれない。…そりゃあ、中学生だから、っていうのもあると思うけど、そんなレベルじゃなくって…なんて言うか、恐竜が猫に相

談できないっていうレベルみたいに思えるの。

あたし、じゃまなのかな？ だったらじゃまだ、って言うてくれればいいのに。そしたら、すぐ出て行けるのに。

あたし、要らないのかな？

六

「どつですか？」

汗を拭いている私に近づいてきたのは、了くんでした。

「いいえ、腕が落ちていようには見えませんね。

私はまったく手を抜いていません。お互い全力でしたら、私の方が負けていたでしょう」

了くんは擦り寄るようにそばに来ると、

「でもあのとき、確かに動きが止まったんだ。一度始まったら相手が死ぬまで止まらないはずの、あの拳でだよ!？」

と、小声でまくしたてました。

わたしは念のため、台所のほうから誰も覗いていないのを確認します。

「あの子…和子くんが、鉄生さまに影響を与えているようですね」

「どうする？このままじゃ万が一ってことが…」

心配そうな表情です。何を心配しているのか、私にもわかりません。わかりませんが、はたして、私たちが口を出す問題なのでしょうか…

「問題はやはり、ご本人がどう思っておいでか、でしょう」

「静観するしかないのか…」

悩む私たちを、台所から和子くんが見ていたとは、このときの私たちには知るよしもありませんでした。

七

久々に十分な運動ができて気持ちがいい。

赫君はあの杖からすると、わしや了君とは違うよ

うだが、わしと同じ拳を使えるのはとてもありがたい。しばらく練習相手に不自由せんで済みそつだ。

それにしても、さすがに喉が渇いた。

「和子くん、すまんが飲み物はないかの？」

台所から、まとめた長い髪がひょい、と出てきた。

——ポニーテール

——『馬の尻尾』を意味する。

なるほど。おそらくは快活さを示すものである。和子くんにはびつたりだ。特に最近元気がないようだから、髪型だけでも元氣であると嬉しい。

「ごめん、ないみたい」

おや、茶も買っていなかったか。ここしばらく和子くんが食料を買って来るものだから、自分では気をつけていなかった。頼りすぎはいかな。

「ねえ、あたしのうちに来ない？きのう、たしかレモンが届いてたはずだから、レモネードつくってあ

げる」

「れもねえど?」

しばし待ったが、奴は何も言つてこない。あまり一般的でないものなのだろうか?

「レモンはご存じですか? …あの果汁に甘みをつけた飲み物ですよ」

「おかあさんが送つてくれた本場ものだから、とてもおいしいよ」

赫君の言葉に、和子くんが応える。れもねえどか。甘みのある飲み物など、いつたい何年ぶりだろうか…いや、考えてはいかん。何日か、何年か、私にはわかりようがないのだ。

「そうか…では、皆でご馳走になるつかの」

八

「和子ちゃんのお母さんは、お出かけなのかい?」
鉄生のマンションからあたしの家に行く途中、話

しかけてきたのは了さんだった。

「ずっとアメリカだよ。戻つてくるのは月に二日か三日くらい」

そう、つて言つて、了さんはすぐ話を変えた。やっぱり、うわべだけで話してる…!

「あぶない!」

ちよつとぼくとしてたあたしは、その声にふつと頭を上げた。その上から、大きな鉄骨が落ちてくる。

見たとたん時間が止まった。大きなそれが、ゆっくりと迫つてるのが、なんか遠くのことのよう…そう思った瞬間、真っ白いものがあたしの頭におおいかぶさつた。——鉄生!!

「了くん!」

「おう!」

ガゴン——!

痛いくらいの音が、頭のすぐ上でした。

耳の中がじんじりする。けど、ほかは痛くもなん

ともない。

そのうち、白い着物があたしから離れた。その後ろには赫さんと了さんが、落ちてきた鉄骨を殴りつけるみたいにして立ってた。

鉄骨は……ぐしゃぐしゃに折れてた。

九

鉄生どのは、とっさに和子ちゃんをかばったんだ。自分の身を顧み^{かま}みずに。たとえそのまま……たとしても、きつと後悔はしないのだろう。

人として、生きる。それはあたりまえのこと。だが鉄生どには……

考えているうちに、和子ちゃんの家に着いた。庭のある、大きな家だ。両親が不在がちでは、鉄生どどのところに押しかけたくなる気持ちも、わからなくはない。

居間に通された僕たちは、それぞれ腰かけて和子

ちゃんを待った。

誰も、何も話そうとはしない。さっきのことを考えているのだろう。

戻ってきた和子ちゃんが、その場でレモネードを作ってくれた。

礼を言つて、口にする。暖かい液体が喉を通過して行く。僕は『おいしいね』と言つてまた一口すすった。

「みんな、なに考えてるの?」

はっ、として和子ちゃんを見た。それほど、固い声だったのだ。彼女は顔を伏せたまま両手を握っている。

そう言えば、和子ちゃんはピンクのセーターと草色のスカートに着替えていた。今の今まで、まったく気がつかなかつたのだが。

「あ、ああ、すまんの。ちよつと、のあ」

鉄生どのが、彼女の顔を覗きこむようにして言う。

「うそ! ちよつと、のわけない!!」

「和子ちゃん?」

僕は思わず立ち上がった。大変なことをしてしまったような気がする。

「悩んでるんでしょ？ なにか心配なんでしょ？」

「なんで話してくれないの!？」

「和子くん、ま、まあ落ち着いて…」

慌あわてている赫さんを、僕は初めて見た。

「あたしは、あたしがなんにもできないのが情けないの—！」

僕は、そのまま椅子に座り込んだ。しまった…鉄生どのに気を取られすぎていた。

「あたしは、みんなの何なの？ あたしは…あたしは鉄生の友達だと思ってる。けど、みんな悩んでてもなにも言ってくれないじゃない！」

「そりゃ、そりゃさ、あたしなんかじゃなんにもできないかもしれないけど、それでもあたしは…あたしは、何かしたいの—！」

「僕たちは黙ってしまった。どう反応していいかわからない。」

友達…！これは、まったくの予想外だった。

「どうして何も言ってくれないの？ あたしが邪魔ならじゃまって言つて—！」

言い切つて、和子ちゃんは顔を伏せてしまった。

僕と赫さんの視線が出会う。友達…もし、友達なら、言つべきだろうか？ 視線の先で、赫さんが肯うなずくのが見えた…

十

そつ、と肩になにかふれた。

頭を上げたあたしの前に、鉄生の顔があった。いつもよりもっと優しい、もっとあつたかい表情の顔が。その向こうに二つの顔が、やっぱり優しく微笑わらつてた。

鉄生が目で合図してる。了さんが、レモン絞りからレモンの皮を取り出して…そういえば、いつの間にか手袋外してるわ…その手の中で、しばつたはず

のレモンが、ぼおつと光ったようになって…皮が、しぼりかすが、みるみるうちにレモンのつぶつぶに変わってゆく——!!

驚いてるあたしの目の前に、棒みたいのが伸びてきた。

その根元には赫さんの手。あの杖。

肩の鉄生の手に力が入った。レモンのほつを見る、っていうのね。

杖がレモンにふれた…とたん、とろつ、と溶けてそのままグラスに流れていつちやつた!?

了さんがさかさず砂糖とお湯を入れて、かき混ぜる。

「さあ、召し上がれ」

あたしはタオルで顔を拭いてから、グラスの中身をちよつとなめた。甘すぎるような気もする、けど、間違ひなく本物のレモネード。

た、ねもし、かけもあるわけないわ。これはぜったい手品じゃない。

あたしは顔を上げた。三人の顔があたしを見つめ

てる。なんか、心配そうに。

そっか。ちよつとだけ秘密を教えてくださいてるんだ。それであたしに訊いてるんだ。「これでも友達になりたいのか」って。

決まってるじゃない!

あたしは、笑って大きく首を縦に振った。とたんに、みんなほつとした顔になった。

「気がつかなくて悪かったね」

最初に口を開いたのは了さんだった。

「普通の女の子が…いえ、普通の人が私たちを友達とってくれるなんて、考えたこともなかったのですよ」

赫さんも言った。思わず背中をさすりたくなるくらい、申しわけなさそうに。

そして、最後に鉄生が言った。

「わしらには言えないことがいっぱいあるんじゃない。ただ一っだけ約束する。わしらは、きみに嘘はつかん。きみがわしらを友と思うってくれる限り、何があろう

と、この約束だけは守る」

考えるより早く、あたしは鉄生に抱きついてた。

十一

鉄生さまと和子くん。二人の後ろ姿を眺めながら、私はくんと立ち尽くしていました。

その姿は、本当の友達同士のものでした。年齢もそして実は立場も大きく違っているというのに。鉄生さまにとつても、あの子はきっとかけがえのない友達なのでしょう。

「運命への挑戦、ですか」

思わずこぼれた言葉は、普段なら一笑に付されてもおかしくないほど陳腐なものです。しかし、私は別の意味で苦笑してしまいました。

どれほど強固な運命であろうと、笹竹一束でこじ開けるのが占術師です。私は知らず知らずのうちに、自分の足元を見失っていたのかもしれない。

私の心は決まりました。しかし、他のみんなはどうでしょうか？ 私が行動すれば、全員が巻き込まれるのです。少なくとも、くくんは間違いない…

「四流集いしとき…」

考え込む私のとなりで、くくんがぼつり、と言いました。そして、そのまま口を閉ざします。

わたしはあとを引き取って

「…必ずや、現れん」

言いおわると、わざと笑顔を作ってみせました。彼は力強く頷くと、私に向かってこう言います。「ここで、終わらせよう」と。

私も大きく頷きました。できるかどうかはわかりません。何百人もの先人が成しえなかったことを、たった数人でやるうというのですから。

それでも、やるだけの価値はあります。鉄生さまの、そして私たち自身の運命を賭けて。

私たちは、人に戻るべきなのです。

街中にある、私の居場所。ほんの数日離れただけなのに、ずいぶん懐かしい気がします。

机の上の埃ほこりを軽く払い、壁に張っておいた人相の絵を外すと、真新しい壁が私を眺めてきます。私は軽くあいさつしました。考えてみれば長い付き合いですから。

そして最後に、机の前にひとつ木の札を下げ、そこを立ち去りました。

木の札には、一文だけ書いておきました。

『三月廿六日、暫シハクシ休業』

第四回 四月一日 街二降ルばふえ

一

春休みも半分おわり。もうちよつとで中三かあ……なんかユウウツ。

和泉和子……わたしの親友がちよつと明るくなつてから、そろそろひと月半。なんかあつたのかな、ってよくきいてると、なんか最近うちに帰つてないみたいなのよね。

親友としちゃ、ちよつと見過ごせないじゃない？だから、きょうは遊びまわつてるトコを押さえちゃうつもり。……言っとくけど、わたしが遊びたいわけじゃないわよ。

二

四月一日、晴天。和子君は今日もこの部屋に泊まっている。

中学生が長い休みをあまり外にも出ずに過ごしているというのは、とても健康的とは思えない。がお蔭で食生活がかなり改善しているのは確かなので、あまり口煩くも言えない。現に、今も昼食の良い匂いが鼻に届いている……どうやら赤茄子で何か作っているようだ。この一月で、この種の西洋野菜にもずいぶん馴染んだ。

「いい天気ですね」

正午の時報と共に居間にやってきたのは了君だ。身の丈六尺弱の体は、私を知る限りでも屈指の大男と言える。それでも私のほうが頭一つ高いのは親に感謝すべきか、あるいは怨嗟の念を持つべきか。

髪の毛を気にする手には薄い手袋。和子君がいる以上止むを得んといえ、私の目には物悲しげに映る。

「おお、了君。遅かったの。トオストが冷めておるぞ」
私はそう言いながら、食卓の上にある皿を勧めた。
「あ、どうも。……ちよつと追加の仕事がありました、

先ほどまで書き物をしていたものですか」

なるほど、徹夜というわけか。いつの世も、楽な仕事などないものだ。

考えつつ、ふと視線が窓の外に出た。暖かい日差しが裏手の川にきらきらと映えている。

「あれ？」

同じく窓の外を見ていた了君が、突然妙な声を上げた。

「どつしたな？」

了君が指さす先では、人が道につずくまっていた。ちよとど和子君と同じくらいの背格好をした、髪の毛短い女の子。

「和子君、あの子は知り合いかの？」

もしやと思い、台所に向かって声をかけてみる。飛び出してきたのは洋風割烹着姿の…

(エプロン！)

…そつ。それ。最近、訂正されることも少なくなってきたが、やはり、たまに頭に響くことがあるな。

うんざりとしている間に、洋風…もとい。えぶろん姿の小柄な体が窓から身を乗り出した。背が低いので私と了君の肩につかまっている。二条に縛った長い髪が、鞭のように頭に当たった。

「あれっ？—美!?!」

どうやら正解だったようだ。となると、普通の、子がいつまでもあそこに居ては危ない。

「すぐに行ってあげると良い。あのままでは倒れてしまつぞ」

うん、と一言残してパタパタと賭けてゆく。あつという間に窓の下にやってきた彼女は、道端の女の子に肩を貸して、こちらに向かってきた。

「来るみたいですね」

了君の声に非難めいた響きが混じる。私はただ顔くだけに留めた。和子君の知り合いなら、助けるのに躊躇するわけにはいかない。

たとえ、いかなる災厄を招くことになるつとも、だ。

三

ぜえぜえ…なんか、とつても気持ち悪い。さつきまで、何ともなかったのに。

ほんと、ついさっき。そう、すぐその交差点を過ぎたところでなんか嫌いな気分になったんだ。それでも歩いてたら、もう、一歩あるくたびにどんどん気持ちが悪くなって…もう、動けない——

「一美! どうしたの!?!」

すぐ近くで、親友の声がした。わたしは、最後の力を振り絞って……

「和子おあつ! 助け…え!?!」

目の前で、和子が目を丸くしてる。わたしはそれ以上に驚いてた。なんで、声がでるの?!

「一美…心配して走ってきた友達に、そういうことしていいと思ってる?」

いけない。目がマジだわ。とりあえず、痛くないけど胸を押さえてあやまるところ。

よくわからないけど、和子が来てから、ふうっ、と体が楽になったんだ。まるで、悪霊でも追い払ったみたいに。…って、なに考えてんだろ、わたし。

和子の肩につかまって、川沿いの小さなマンションの階段を上がると、ぼつん、とひとつだけドアがあった。そこがぱかっと開いて、出てきたのは背の高い男の人。

「ごめん、ちょっと友だちが気分悪くなっちゃって休んで、いいよね?」

四

玄関から中に入ると、四角いテーブルのある居間。その手前側の椅子に座らされた。さっき出てきた男の人が、黒い手袋をはめた手でコップを差し出してくれる。手にびったりと貼りついてて、まるでお父さんが舞台で使ってるのみたい。

「え、と。舞台で使うのは白、だっけ」

「え？」

なんでもないです、って手を振って顔だけ笑ってみる。受け取ったコップからはレモンの香り。

「あ、気分だいじよぶ？」

男の人の脇から、和子がひよい、っと顔を出した。なんか並んできると兄妹きょうだいみたいなかんじ。

わたしは、へいきへいき、と笑って答えた。レモン

水が入っていたコップを和子が受け取って、

「道端でしゃがんでるんだもん。心配したんだよあ」

ってぶつぶつ言いながら別の部屋に入っていく。

きつとあそこが台所なんだ。

「しばらく休んでゆくとよい。ふらついてたりして

は、家の方が心配するじやろう」

後ろから声が出た。おじいさんみたいな言葉づか

いだけど、ずいぶん張りのある、澄んだ声。

振り返ると、そこには白い和服姿の大きな人がいた。黒手袋の人も大きいけど、とても比べものにな

らない。

「よく来たのお。一美君」

「あれ、鉄生てつせい、一美のこと知ってたっけ？」

台所からひよこつ、と顔を出して和子が聞いた。手に紅茶のカップを持って。

うん。わたしは知ってる。この人は…

「おお。和子君の友人で、奇術師をしておられるさかき 榎の娘さんじやろ」

「やつぱり！この前お父さんの代わりに舞台上に立つてくれた人だよね」

白い着物の大きなひと…鉄生さんが笑った。頭の上で縛ってる髪がゆれる。顔は若いのに、笑い方までおじいさんみたい。

「うむ。あれはなかなか楽しかった」

って言いながら、テーブルの横の椅子に腰かけた。東側の出窓に背中を向けてる。手袋の人はその反対

側に、和子は四つのカップをテーブルに置いてから、わたしの正面に座った。

テーブルの上にはポットと砂糖だけ。テーブルク

口入はぎつくり編みの生き成り麻な…たぶん和子の趣味。

紅茶はリプトンのティーバッグ。少しだけ砂糖をいれて、かばつと飲みながらまわりの顔を見てみた。うん。この二人、間違いないわ。

「鉄生さん、って…お父さんが折つちやつた足を治してくれた人。でしょ？」

「いや、違つのお」

紅茶をすすつている鉄生さんが、すぐに答えた。

あれ？おつかしいな。ぴつたりなのに…でも、嘘ついでるようには見えないけど…

「あれをやつたのは、この了君じゃ」

げふっ！

大きな音がして、テーブルクロスに染しみができた。

「わしも手伝いくらいはしたがの…どうしたな？」

げほげほ、むせてる黒手袋の人―了さん、かな―の背中を、和子がなでてる。

鉄生さんって、割とおちゃめな人みたい。

「鉄生先師せんし!!」

「仕方なかるう、隠しておつても、和子君が気まづくなるだけじゃ。わしらはタダでさえ目立つのじゃからな」

了さんが頭かかえてる。あはは。

「そうそう。お父さんに聞かされた『ムサイ天使』そのままもんね。すぐわかつたよ」

言いながらわたしは立ち上がつて、まだ頭をおさえている了さんにおじぎをした。

「お父さんの足をを治してくれて、ありがとつございました」

ふわつ、と髪の毛が動いた。そのままぼんぼん、つて軽く叩いてる。

「治せない怪け我がや病気はいくらでもあるんだ。たまたま治せてよかつたよ」

わたしはにっこり笑つてまた腰掛けた。了さんも仕方なさそうな顔で笑つてる。部屋の中で黒い手袋

なんておかしな人だと思っただけ、うん。悪い人じゃないんだわ。

わたしはよけといたティーバッグをまたカップに入れて、二杯目をいれた。

「でさあ〜」

舌つ足らずな、甘えるようなしゃべりかた。

和子のはっとして口元を押さえてる。なぐるほど。ここじゃネコがぶってるんだ。

でも、ぜったい正体バレてると思う。だって男の人ふたりは、わざと目をつぶって紅茶飲んでるんだもん。

ちらちら見回して、だれも変な顔をしていないことを確かめてから、和子が言った。

「一美、こんなとこまで来て、なにか用じゃなかったの?」

「ああ、それならもう済んだんじゃないかな」

わたしの目をちらつと見て、了さんが言った。

「え? そのなの?」

「少なくともわしらに後ろ暗いことはないでな」

鉄生さんも、了さんと同じようにちらつと見てる。

あははは、バレバレかあ。

「? …… ああっ! 一美、あんた変なこと考えてたでしょ!!」

「いや、だってさ、女子チユーガクサーが夜な夜なオトコのマンションに入り浸^びってるのよ。こんなおもしろい… いたつ、痛いってば!!」

大きなクッションが、ばしばし当たってきてる。その向こうに和子の真つ赤な顔。あいかわらず、免疫ないんだから。

「まあ、その辺にしておくんじゃない」

「本気で心配してくれる友達を殴るっていうなら、僕たちも承知しないよ」

あらら、こんどはわたしの方が赤くなっちゃう。

ああ、なんかいいなあ、この人たち。わたしも仲間になりたい…

五

殴るのに使ったクッションをイスの背中に戻してると、ふいに一美が言った。

「ね、『まじつく・びえろ』に入らない?」

一瞬。鉄生と了さんが目を見合わせてから、ふたりにして笑いだした。

「わ、笑うことないじゃない!」

一美は真っ赤になって怒ってる。鉄生がまあまあ、って手でなだめてるけど、ふくれた顔が戻ってない。

『まじつく・びえろ』は一美のお父さんが参加しているマジックサークル。足を折ったおじさんの代わりに鉄生がお面をかぶって出てたけど。あたしは知ってる。あれは、マジックじゃない、って。

「よいかな、一美君。鳥が空を飛ぶのを奇術とは呼ばんじやろ? 魚が海の底を泳ぐのものお。わし達もおなじじゃよ」

「こないだの、空中追いかけてこも?」

そうそう。鉄生と了さんが見せてくれた最後のマジック。舞台から空中に飛び出しての追いかけて。すごかったけど…きっと、あれもマジックじゃないはず。

「もちろん。あれはマジックなんかじゃないよ。そうだな…和子ちゃん、片栗粉かたくりこでもない?」

うん、って言うって台所から粉を持ってくる。テーブルの上に新聞紙を乗せて待っていた了さんに粉を渡すと、30cmくらいのところから少しづつ落としていった。

さらさら、落ちていく。細かい粉が、まっすぐに…え?

テーブルから15cmくらいのところで、粉が散った。ううん、散ってるんじゃない。すべり落ちてるんだ、まああるく。まるで、そこに見えない球があるみたいに…

「これ!」

「了さんが目でうなずいてた。」

「そっか、これに乗ってなんだ」

「実際にはもう少し大きいんだよ。あまり小さいと滑ってコケる」

突然くすくす笑い。一美だ。

「お父さん言ってたよ。舞台裏で何度か落っこってた、って」

「階段じゃないからねえ。実際にはこの結界をふたつ、踏み台にしてたんだよ。蹴ったのをすぐ消して、次の踏み場所にまた新しく作らなきゃいけない。消すのが早すぎたり、作るのが遅すぎると……ってわけ」

「了さんは両手を広げて、バランスをくずしたポーズをとってみせる。くすくす笑うあたしたちにちょっと照れ笑いしてる。」

「本番でも落ちてこそないけど、実は何度かコケてたりするんだよ」

「飛んだりとかは、できないの?」

「一美が目を輝かせて鉄生に話しかけてる。鉄生は

笑いながら首振ってた。

「わしはできんな。じゃが了君はできるのではないかな?」

話を振られた了さんはちよつと考えてから、

「できないことはないですけど……僕のは舞台じゃ無理ですよ。屋根壊しちゃいます。」

狭いところを自由自在に飛ぶとなると……朋さんならできそうだなあ。あ、でもあの人が飛ぶと舞台燃やしちゃうか」

「それじゃ赫さんは? 赫さんは何ができるの?」

調子に乗って、あたしも聞いてみた。赫さん……いづも杖を持つてる小柄な占い師のおじさん。ここんとこ、この部屋には来てないけど、あの人も鉄生と同じで、きつと変なことができるはず。」

「そうだなあ、赫さんの得意と言ったら、やつぱり水芸、かな」

「それはまあ、やれと言われて、出来ないわけではありませぬけれど」

え!?

みんなが声のほうを向いた。玄関には、小柄なおじさんが立つてる。もちろん、手には亀の細工さいくをつけた杖を持って。

「あ…ああ、赫さんが。お帰りなさい。」

それで……」

「私はやりませんよ。マジックでそれは反則ですからね」

「そうじゃなくて…」

「了さんは笑いながら、あわてて手を振ってる。」

「朋さんの件ですよ」

「あれ? っていうあたしたちの顔を見て、

「さつき言つてた人だよ。仲間に入りたいから、赫さんに説得をお願いしてたんだ。」

で……?」

赫さんは居間のすみっこにあつたいすを了さんのそばに持つてきた。杖を大事そうにかかえながら座つて、

「ええ、朋さんには承諾して頂きましたよ。ただ、あの人は…その、私たちと違つてまともな職業ですから、ね」

まとも、つて…

「…赫さんたちは、まともじゃないの?」

「まあ、もの書きと占い師だからねえ」

「休業するのに、あまりしからみはありませんね」

「了さんと赫さんが顔を見合わせて苦笑い。そんなもんなんだあ。」

「じゃ、その人は?」

「大学の先生なんだよ。数学を教える」

げ!!

「…あ、いけない。声に出ちゃった。しかも一美と同時に。」

「了さんがあたしたちを見て、また苦笑いしてる。」

「あゝあ。やつちやった。」

「朋さんが来て時間が取れるようなら、数学の勉強を見てもらうといいよ。きつと得意科目になるから。」

——じゃあ、もう暫らくかかりますか」

赫さんは了さんのカップを使って、新しいティーバッグで紅茶をいれた。了さんはなんにも言わない。別に気にしていないみたい。

「手続きに時間がかかるだけで、休みは充分取れそうですよ。問題は、どれぐらいの期間を申請するか、です。ちゃんと決めておかないと」

「堅い商売だからなあ……わかりました。だいたい見積もっておきましょう——」

ぼんぼんと二人の間の会話をながめていたけど、なんかいごち悪くなってきた。一美も同じみたいで、さつきからなぐんかふくれてる。

しょうがないわ。ここは鉄生たちだけにしてあげよう。

「鉄生、まえにパフェ食べたって言ってたよね。一美もいるし、作ってあげるね」

ほら一美、台所いこー！」

六

お台所。あたしと一美は、パフェ作りにとりかかってた。

「ねえ、和子」

「ん〜？」

って鼻で返事しながら、あたしは冷蔵庫をあさってた。たしか、紙パックの生クリームがまだあったと思う。

「ここってさあ、新品みたいだよねえ」

「ん〜」

イチゴも残ってたはず。たしか野菜室の方に…

ばこんっ！

あいたっ！！

「ちよつと一美、ボールで殴らないでよ。それ金のでしょ!？」

「ぼ〜っとしてるからいけないの」

あのねえ……って言おうとして、気が付いた。一美のようすが、なんか変。

「どしたの、一美？」

声をかけたら、ぷい、って横向いて、うつわ探してる。あ、なんか腹たつ態度。

でも、一美がこつこつ怒りかたする、っていうのは以前にもあった。あれはたしか……ええと、そう。お父さんのマジックを、ばかにされたとき——

「一美い。ホントに鉄生たち『まじっく・びえろ』に入って欲しかったの？」

ぴくっ。一美の肩がふるえた。やっぱ、わかりやすいわ。

がばつと振り返って、

「だって、だってあれだけのことができるのよ！ 不思議な力？ いいじゃない。わたし感動したわよ。落ちそうになりながら透明な球作ってたなんて。空飛んでる鳥だっていいじゃない！ 羽はたかなきゃ、空だっていけやしないわ!!」

どうどうどう……いまは手綱たづなが欲しいわ。切実に。

「だったらさ、みんなで食事して、そこでまた言ってみようよ。どうしてもイヤっていうのじゃないなら、きつとわかってくれるよ……だから」

あたしは目の前の……につつき金ボールに生クリームをぶちこんだ。

「落ち着くまで、これでストレス発散してね」

七

出来上がったパフェを持って台所を出ると、ちょうど了さんが熱弁をふるってるところだった。

「——ですから、同一時点で長時間存在するために、その余計なエネルギーを別の方法で消費してしまえばいいわけです。たとえば——」

ちんぷんかんぷんな話で目の前がくらっ、としたけど、なんとか気をとりなおして、胸を張ってみる。「お待たせ」。ちよつとテーブル片かたしてくれる？

「わ!!」

あたしの足が、何かに引つかかった。

「わ、わ、…あわっ!!」

お盆から、パフェが浮いた。あたしは体をひねってなんとか踏みとどまった。けど、パフェが…

「あぶない!!」

了さんがくるつと振り向いた、そのとたんに…とたんに…パフェのまわりに箱ができた。箱がピカって光ったら、中身がぜんぶなくなっちゃった!!

「い、い、いま、ピカって!ピカって消え!!」

「…しまった」

あたしの手には、ただお盆があるだけ。そのお盆を、了さんがぼんやりした目で見つめてる。

「飛ばしちゃった…」

「どこに!?いつ!?!」

初めて聴いた。赫さんの厳しい声。

「この真上…上空およそ750m」

「時間は？」

「約…15分後。15時28分35秒ないし40秒」

え…つと…

「どういうこと？」

「わかりやすく言いますと…」

赫さんが頭をかきながら、あたしたちの方に向きなおった。ちよつと顔が青い。

「東京タワーの倍以上の高さから、重さ200g以上のガラスの塊が5個、中身入りで、街中に降ってくるのですわ」

「なにそれ!?!」

「ばこん、と音がする。あたしの手から、お盆が落ちた音だ。なんか、遠くの出来事のように聞こえる。

「当たったら当然危ないし、空中で割れたりしたらさらに危ないですな。というわけで…了くん。責任とって行ってきなさい」

話してる途中で了さんが立ち上がった。そのまま玄関に向けて駆け出してく。

あたしは意識が薄れるのをなんとか食い止めた。

「待つて！あたしも行く!!」

「ああ、和子くん。行くのならこれを」

赫さんの手から拾ってくれたお盆を受け取って、あたしも外へ飛び出した。

ベタ靴置いといてよかった。急な階段を二段抜かして駆け下りながら、あたしはそんなことを考えてた。階段を降りきつたら、裏の河原の方で了さんのくつきが濃くなってる。あたしは玉石につまつきながら、そこに走った。

八

河原のすみ。低い木が生えたところ。そこに了さんがいた。青白い光につつまれて。

「了さん、お盆！」

なんかまぬけ。言ってから思っても遅いんだけど。よく見ると、了さんは手を胸の前に縮めて、二本

の指を小鳥みたいな形にしてた。…お盆、渡すの無理みたいだね。

「一緒に行くなら、どこでもいいから掴まってくれ」了さんのまわりが、青白くばおっと光っている。よく見たら背中の後ろあたりにふたつ光の出っぱりがあったから、そこにつかまってみた。

「いいよ。…たぶん」

青白い光がだんだん大きくなってる。なんか足元がゆらゆらするなあ、って思っただけなら、いつものまにか足の下にも光が入りこんでた。よくわからないけど、足元が地面から離れてく。でも怖くない。青っぽい光の上に乗っかって、ゆっくりと川のほうへ進みながら昇ってく。

川を半分渡ったくらいのとこで、ぐるーっとまわりはじめる。いきなり、って感じじゃないから、きつとわざとだね。

大きく回ってたら、後ろにのびてる青い光のおびが渦巻きみたいに見えた。おびの上の方はとげとげ

して見えて、なんか：

「龍みたい…」

了さんは笑って答えた。

「そう。だからこの術を『蒼竜変化』と呼ぶんだ」

九

「行ったのぉ」

鉄生さんがやけにのんびり言ってるのが、なんかイライラする。玄関から外へ出ると、河原の隅のほうで和子が了さんの背中に乗っかってるのが見えた。しばらく見ていると、二人が宙に浮いていった。はじめはゆっくりと、そして、だんだんスピードをあげて。

「なに、あれ？」

「ん？…おお、そうか。見えないのが普通じゃったな。和子君を見ているとつい忘れてしまっくんじゃが」

へ!!

一瞬ぼけ、となったわたしの頭に、さっきの話が浮かんできた。そうだ、了さんが言ってたじゃない。『僕が飛ぶと、舞台の屋根壊しちゃう』って。

「まあ、心配せんでも、了君なら二里くらい上がるのは造作もあるまいて

…ん、どうしたな、赫君」

鉄生さんが振り返った方を見ている。と、赫って呼ばれてたおじさんが難しい顔をして玄関に立っていた。

「先ほどからずっと考えていたのですけれども。彼は…了くんは果たして、降りることを考えているのでしょうか。パフェと和子くん付きで——」

十

足元はきらきら輝く青い光。まわりもぼんやり薄い青の光につつまれてる。けど傾いてくお日さまはやっぱりオレンジ色で、パフェの上に乗せたいくらい。

青い光のなかのあたしたちは、だんだん大きな円を描きながら、どんどん、どんどん昇ってく。川の向こうの大きな山からさらに奥の山が見えても、まだどんどん、どんどん昇ってく。

「もうじぎ目標の高さだけど、もう少し高く上がるよ」腕と胸で押さえてたお盆がずり落ちてきたから、口で引つ張り上げたところでしたさんが言った。

あたしは口が開けなくて、奇妙な音で返事する。あ、ちよつとヨダレたれちゃった。あとで拭ぬぐこつ。

そうそう、もうじぎ目標…ってことは、地面から750mかあ。あたしは下を見てみた。なんか、地図、って感じ。

家はおつ、どれがどれかわかんない。こちやこちやしてて、モザイクみたい。ところどころ一色に見えるのは学校のグラウンドや小さな神社。川はへびみたいくねくね曲がって、ところどころお日さままできらきら。とつてもきれい。

「…もうあと五分ほどだね。じゃ、出てくる場所の周りを旋回するから」

了さんの声にはつとした。いけない、いけない。なににに来たのか忘れちゃってるわ。

でも…

「きれいな空…なんか、気持ちいいね」

濃い青の光の中にいる了さんが、頭を上げた。

「そうだね、本当に。今度機会があったら、成層圏まで連れて行ってあげるよ」

『成層圏』聞いたあたしは思わずくすくす笑い。だって、ねえ。いくらなんでも、息がでなくなっちゃうじゃない？

「いや、冗談じゃないよ。きみの周囲にある青い光だけで、これで外界から隔離してるんだ。だからほら、結構高いところまで上がったのに、耳が痛くならないだろう？」

そういえば、うん。こんなに勢いよく昇ってきたのに、風も感じないもんね。そっかあ、かたいガラ

「スミたいなものなんだ——え？ああつ！！
 「じゃ、じゃあ了さん、どうやってパフェ受け取るの!？」

答えがなかった。

しばらく…ほんとにしばらくしてから、小さめの声が出た。

「…ごめん。僕一人だけのつもりだったから、考えてなかった…」

やつぱりいゝ!!

「ああ、心配しないで。さっきの階段じゃないけど、デカイ結界作ってそれに乗れば何とかなるって」

大丈夫かなあ…あたしは不安なまま青い円の真中を眺めてみた。そしたら、白っぽく光るものが見えた。

「了さん、あれ?」

あたしがそう言うよりも早く、青い円が渦巻きになっていった。光の近くに寄ってるんだ。

「それらしいな。最接近したところで術を解くから、お盆をしっかりと握るんだよ…それじゃ、いくよ!!」

ふわっ

いきなり、足元がなくなった。トンネルに入ったみたいに耳がキーンと痛くなる。ぴゅうぴゅう吹く風を感じる。

あたしは目をつぶった。下を見たら泣きそうだったから。お盆をぎゅっと抱きしめた。了さんとの約束だから。

了さん、早く、早くっ!!

祈った次の瞬間、おなかの脇をぎゅっと掴まれたかとおもったら、足元ができた。

「さ、目を開けて。正面だよ!」

あたしはお盆を持った手を、まっすぐまえに突き出した。同時に目を開けると、そこにはいつつのパフェが乗っかっていた。

十一

「降ろす方法って、ないの!？」

—美くんが叫んでいます。…無理もないことです。

「落ちたら死ぬような場所に親友がいて、降りる手段がないかもしれないのですから。」

「あることはあるんじゃない。じゃがのお…」

「『昇竜界』ですか?」

「私は鉄生どこの言葉を引き取りました。たしかにあの術ならキ口単位でもなんとか降りられるはず、ですが…」

「あれを使ったのでは、今度は下におる者が危険じゃな」

「私にひとつ考えが浮かびました。が、口を開こうとしたとき、」

「いいかげんにして!!」

—美くんに阻はばまれました。

「考えてわからないなら、行くしかないじゃない!」

和子たちはどこにいるの!?! あたしが行って、マットでも安全ネットでも持って待ち構えてやるわ!!」

上空750mから落ちてくる人間二人を、マットで受け止める、ですか。私は悪いとはおもいつつも、つい口元が緩ゆるんでしまいました。

——これは、「ご期待に沿そわねばなりません。」

「場所なら、私が変わりますよ。では…行きましようか」

十二

パフェはなんとか受け止めた…なぜかみくんな凍っちゃってたけど。アさんに聞いたら、この移動方法はまだ誰も試したことがないから、なにが起こったのかわからない、みたい。納得はできないけど、なっちゃったものはしょうがないわよね。

でも凍ったパフェなら下に降りるまで崩れないし、かえってよかったのかも。

そんなことを考えてたら、了さんが言った。

「さて、どうやって降りようか…」

「え？」

一瞬、あたしは言葉の意味がわからなくなった。どうやって…どうやって、って、なに？

「実はね、さっきの術は一度解いちゃうとしばらく使えないんだよ」

ピシッ。…って、なにかが割れる音がした。そんな気がたしかにした。

「とりあえずは、大きめに作った球に乗ってればいいけど…このままだと回復できないしね」

せめて、下にだれもいないってわかれば、なんとかなるんだけど…」

下を見た。目に見えない球を通して、マッチ棒の頭くらいの家がいつぱい並んで見えてる。

「だれかいると、だめなの？」

「うーん…そう、たとえば、ロケットを考えてくれ。」

上空から地面に向かってまっすぐ着陸するところだ。当然、炎は下を向いて噴射ふんしゃされるよね。もし、この真下に人がいたら――

今やるうとしてるのも、似たようなもんなんだ」

はは。なんとなくわかった。あはは。笑いが引きつってくるのが自分でもわかる。あはははははは

…いけない。了さんが心配そうな顔してきた。少しおちつこう。

「まあ、他の降り方も考えてみるから、和子ちゃんはとにかく、そのパフェを守ることだけ考えてくれ。」

…大丈夫。生き残ることにかげちゃ、僕らに勝るヤツはいないんだから…」

十三

「いけませんね。街の方まで風に流されてますよ」

赫さんって人が言った。あのマンションからもうずいぶん走ってる。走るの速すぎて、息が切れちゃ

う。時々とまって上空にいる(らしい)和子たちの場所をチエックしてるからなんとか追いつけるけど。

「い、いま、どのへん？」

赫さんがくるつと振り向いた。心配そうな顔。

「もう大分降りてきているようですよ。ほら、肉眼でもなんとかわかります」

汗だくの顔を手でこすりながら、指を指している方向をじっと見てみた。…言われなかったらゴミとしか思えないのが、確かに浮いている。思わず赫さんの顔を見ると、にっこりうなづいてた。

「問題はここから下じゃの。どうも『風』が途切れちゃうておるようじゃ」

「もう、見つからずに降りるのは無理ですね…」

わたしの隣で、静かな声が出た。鉄生さんといひ赫さんといひ、あれだけ走ってなんで息切らしてないのかしら。なんか腹立つわ。

「要するに…見えるようになら…降りられ…ってことね!!」

はあはあ言いながらだと、まともに喋れないじゃない。ああ、悔しい！いいわ、見てらっしゃい。あたしにだって、できることあるんだから。

あたしは2回深呼吸してから、携帯の短縮キーを押した。何回かのコールのあと、相手が出る。

「あ、お母さん？あたし。一美。お父さんに、急いで来て、って言うて。場所は…」

二人があっけにとられて見てる。ふふ。

「か、一美くん、いつたい…？」

携帯を切って、ポケットにしまいこんでから、わたしはカッコつけて両手を広げた。

「イツツ・シヨウタイム、よ!!」

十四

もうずいぶん降りてきた。よく見れば、もう下にいる人の服までわかる。あたしの真下は商店街みたい。

でも、了さんはじつとあたりをにらんだまま。…し
かたないんだだけ。

ここまで降りてくるのだったが大変だったんだから。
『風』って呼んでるなにかに乗っかって、すこしづつ、
すこしづつ降りてきたんだ。でも、ここから下には
『風』が流れてないんだって。どうするつもりかな？
こついう時に言ったら悪いけど…パフエ、溶けて
きちちゃってる。下までもつかなあ…

そんなことを考えながら、ぼーっとしてたら、目
の前のくうきがへによつ、てなつた。

風が『かたまってる』おかしな言い方だけど、こ
れが一番あつてると思う。

「風文呪だ。なんだろつ？」

了さんがかたまりを右手で握った。目をつぶって、
時々うなづきながら。

「げ、なんだと!？」

びっくりした。なに、なに!？」

「うーん…確かに、他に手はない、か。

仕方ない！和子ちゃん、片手でお盆を握って、も
う片手で僕につかまるんだ。あとは僕の言うとおり
に動いて」

「ねえ、なにがあつたの？」

「どうやら、一美くんがお父さん呼び出したらし
い。それで…」

「それで？」

了さんがちよつと口ごもつた。空を見上げて、た
め息ついて、

「僕たちをマジックショーに仕立てるんだと！」

十五

「さあお集まりの皆さん、『まじつくびえろ』最新の
マジック、お楽しみただけでいいでしょうか？」

燕尾服に黒い帽子。伝統的な奇術師服に身を包ん
だ一美君の父上…榊殿が、商店街の中央に陣取って

いる。

上空の二人はすでに『見えない風船で浮かせた』こととしてしまった。三個の風船を一つづつ割って、上空四十丈からの脱出劇。

…彼が到着してわずか半刻ほどでこれほどの条件を作り上げてしまうとは、なんとという話術か。一流の奇術師とはこうも素晴らしいものか。

「鉄生殿…」

赫君が声をかけて来た。私達は奇術の邪魔にならないよう、小さな路地に隠れている。

「風文呪は届いたようじゃ。あとは拳銃に合わせて指示を送れば良かるつ」

私は、榭殿の動きをじっと見ていた。その目がちらりとこちらを見る。私は軽く首肯^{うなず}く。

「まずは、左の風船！」

玩具^{おもちゃ}の拳銃を宙に向け、引き金を引く。その直前に私は風文呪を使った。

パン！

軽い響きがあたりに伝わった瞬間、空中の二人が、がくつと左に傾いた。そのままゆらゆらと前後に揺れている。

脇で赫君が汗を拭^{ぬぐ}っている。

「続いて、右の風船！」

わずかに目標をずらした指が、引き金を絞る。

パン！

空中の二人が、今度は右に傾いた。平衡を失ったように、ゆっくりだがくるくると回りはじめる。

周囲の観客からは、喧騒と息を飲む音が半々に聞こえる。

「さあ、いよいよ最後です。この高さからの脱出なるか!? よくよくご覧ください!!」

赫君が左手に持った杖の頭に、そつと右手を添えた。了君が失敗した場合を考えているのだろう。無

論、私も準備する。了君も、赫君も失敗した場合。最後の最後は私の番だ。

神殿の右指が最後の引き金に掛かった…

十六

最後の一発…あたしを抱えている了さんの腕に力が入った。

「いつくぞあー!!」

了さんが右手をさっ、と上げた。とたんに足元がなくなる。おちる。おちる。おちるううう!! しっかりと抱えられてるって言ったって、いっしょに落ちてちや意味ないっ!!

…でも、あたしは目をつぶらなかつた。そのかわり、目の前のパフェをじっと見る。パフェが崩れないように。願うのは、それだけ。

「4・3・2・1…ごっすりゃっ!!」

変なかけ声といっしょに、なにかがあたしたちを

持ち上げた。

最初は風かと思った。けど、ちがう。手の中のお盆もゆれてないし。下から押されてる感じ。

「もう一度落ちるぞ!!」

ふわっ、とまた足もとがなくなった。こんどは2秒もしないうちにまたブレイキがかかる。

「次で最後だ。和子ちゃん、笑って」

へ？

「笑つんだ」

え、え？ええっ!!

「いいから笑う!これはショーなんだから!!」

はっとした。そう、そうだ。下にいる人たちにはショーなんだったわ。了さんはマジシャン。あたしは…アシスタントの女の子。

それじゃいくわよあゝ…せえ、のあ、にこっ!!

「よし、落ちるぞ。笑ったまんまで…そあれっ!!」

十七

「——我ら『まじつくびえろ』の新メンバーに、盛大なる拍手をお願いいたします！」

商店街の真ん中に、割れんばかりの拍手が響き渡った。

僕は紳さんに腕をつかまれるまま、あちこちを向いてお辞儀をする。地面に降りた瞬間にかぶせられたビエロの仮面が左右にずれるのを、なんとか抑えながら。

そばに居るのは一美くん。いつの間に着替えたのか、立派なステージ衣装で笑顔を振り撒いている。

和子ちゃんも降りしなに赫さんのところに飛ばしたのでここにはいない。今ごろはきつとみんなどパフェを食べているのだろう。まあ最初の一口は僕の口に放り込んで行ったから、その点で不満はないけど。

それにしても、まさかマジックサークルに所属す

ることになるうとは。自分の身の上を考えると妙な笑いがこみ上げてくる。僕たちがあまり目立つたことをすれば、居づらくなるのは目に見えているんだ。特に現代の日本では。

このままマジックをやり続けたとして、騒ぎを起さないでいられるのはせいぜい——

「一年」

「？」

低いつぶやきに振り返る。

「最長一年。朋さんにはそう伝えるとしましょうか」
壁に立てかけてあった杖を取ると、赫さんそのまま駅のほうに歩いていった。

「一年。か……」

その背中を眺めながら、僕は思わずつぶやいた。一美くんも腕を引っ張られて、形だけ即席マジシャンに戻しておく。

四月一日。パフェが空から降った日。この街で過ごせる期限が決まった日。

成功しても失敗しても、あと一年……

十八

お客様への最後のごあいさつが終わって、わたしはステージ代わりの台をトラックへ運んでいる。

だいたい片付いたところで、聞きなれた声が聞こえてきた。

「美しい〜！」

声のほうを振り返ったら、和子と鉄生さんが一緒に歩いてた。手にはパフェ……のうつつわを持って。

「ごめ〜ん。溶けちゃったあ」

……

「代わりに、あまりのイチゴ、あまったホイップと混ぜてみたの。ほら〜！」

わたしは、和子の目を上目づかいに、じと〜、っ

と見てた。けど、途中で吹き出しちゃった。

まったく、さっきまであんなに高いところにいたって言うのに、もう笑ってるんだから……だから、かなわないんだな。和子には。

よあし、和子は無事だし、了さんは『まじっく・びえる』に入ってくれるし、わたしは久しぶりにステージ衣装が着られたし。パフェはなくても、ま、いっか。

四月一日。パフェが空から降った日。面白い人たちと知り合えた日。

暗い中三も、これで結構楽しくなりそう

あとがき

え～、できれば書きたくないあとがきであります。そんな目で見ないで～(^_^;))

なんでこんな話を書いたか...ことの初めは、夢だったのです。

夢の中で、私は自転車のそばに立っています。自転車のかごの中には、箱に入った大きなハート型チョコレート。雨が降ってきて、私はチョコレートの入れ物に雨水が溜まるのをなんとか防ごうと水を捨てています。

そのうちに、道の向こうから女の子がやってきました。私は(なぜか)そのチョコの持ち主だとさとして、近づくと言...他人に聞かれたら抹殺するしかないほどのクサイセリフを吐いて、チョコを渡そうとしました。ところが女の子はそれを押し返して、私に食べてくれ、と言います。そこで一口かじってみると...味はありませんでした。そのかわり、その女の子の気持ちが、しみるように伝わってきたのです。

悲しい。恥ずかしい。寂しい...

私は泣きそうになりながら、なんとかこの子を笑わせることはできないか、と...そう考えたところで目が覚めました。

...実に、発行予定日一週間前のできごとです。その週のことは、もう思い出したくもありません。

もう寝よう、もう諦めよう...しかしそのたびに、夢の子の顔が頭に浮かんでくるのです。これはほとんど、拷問に近いものがありました。

一応これを書き上げて、これから床に入ります。夢の中のあの子、今度は笑ってくれるでしょうか？

...と、というのが「午後ヨリ小雨」のときのあとがきでした。

本編より恥ずかしいあとがき書いてどうしようっていうんでしょ
うねえ(^_^;))

きっかけは確かに前ページの通りで、単発の話のはずだったの
ですが...書いているうちに、これを今まで暖めていた話とつなげ
てしまおう、と考えるようになりました。

いつのまにか4話。何年も暖めつづけていたので終わり方は見
ているのですが、途中をどこまで書けるのか、ちょっと心配ではあ
ります。

また、この話は私にとっては実験的な部分もあります。すでに
おわかりかと思いますが、今までに書いたものとは文体がガラッ、
と変わっているのです。

『一人称切り替え形式』とでもいいますか、語り手が何の説明
もないままにコロコロ変わっていく文体。これ、実は苦しまぎれ
の策だったりします。三人称では書きたくないけど、一人称だと
すぐに正体がばれてしまう。そこで、ばれそうな述懐をしそうに
なったら...語り手を変えてしまえ！ と、いうわけです。

その代わり、この文体ではじめてしまったからには、貫き通さな
ければなりません。この文体の最大の弱点は、誰が語っているの
かわからなくなってしまうこと。現在の主要登場人物は全部で6人
ですが、最終的には15人程度まで増えます。そのときにも破綻し
ないで済むかどうか...頑張りましょう(^_^;;;)

この本に関するお問い合わせは、奥付の住所、または電子メールにてお願い致します。

e-mail nyankoh@sake.st

ハンドルは、“猫好. K” もしくは “金井亭 猫好” です。

また、細々とながら情報ページを作っております。

酒処金井亭 うえぶ店

<http://sake.st/nyankoh/>

お目に止まりましたら、よろしくお願いたします。

追記：私の書く文は、基本的にコピーフリーです。コピーしたいなんていう奇特な方は、以下の三つの条件を守っていただければ、いくらでもして頂いて構いません。

1. 表紙を含む、すべての頁をコピーすること。
2. 表表紙から裏表紙までを一セットとし、各頁を分離したり、新たな頁を加えたりしないこと。
3. コピーに際して必要な、最小限の費用を越える金銭授受を伴わないこと。

奥付

発行 酒処 金井亭

発行日 平成十三年十二月三十日 (第一版)

連絡先 〒 240-0026 横浜市保土ヶ谷区権太坂1-23-7

三谷 淳